

42476

教科書文庫

4
810
42-1941
200030
2118

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

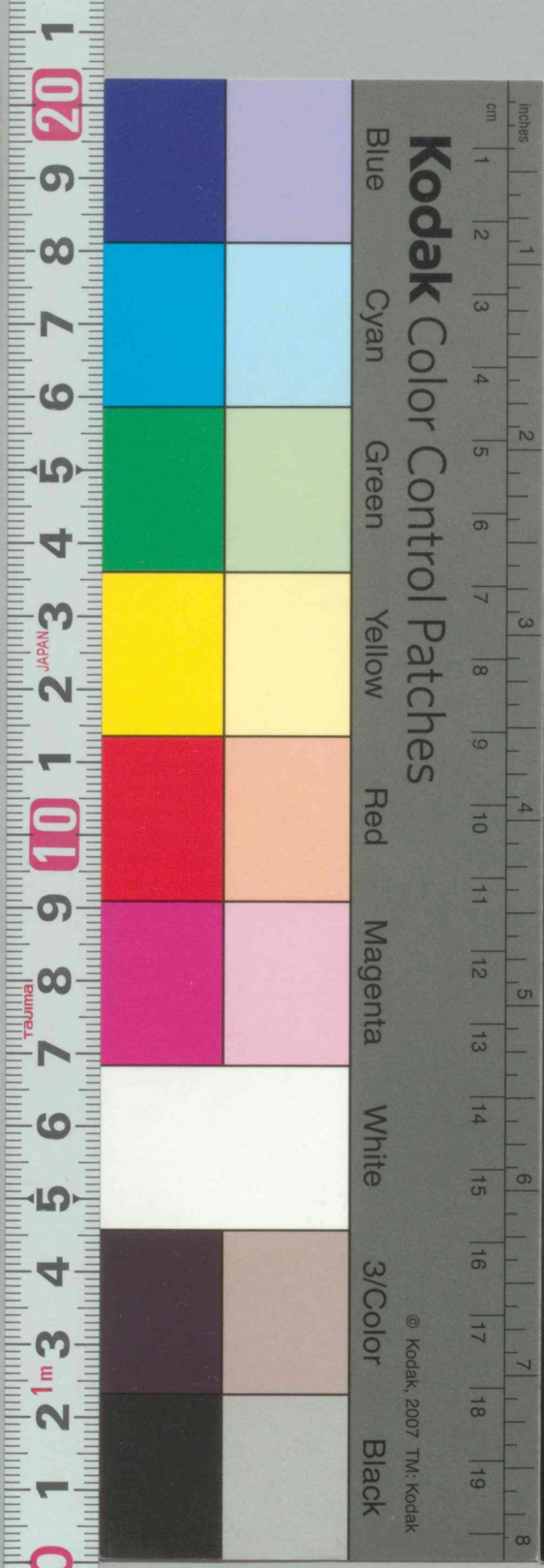


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



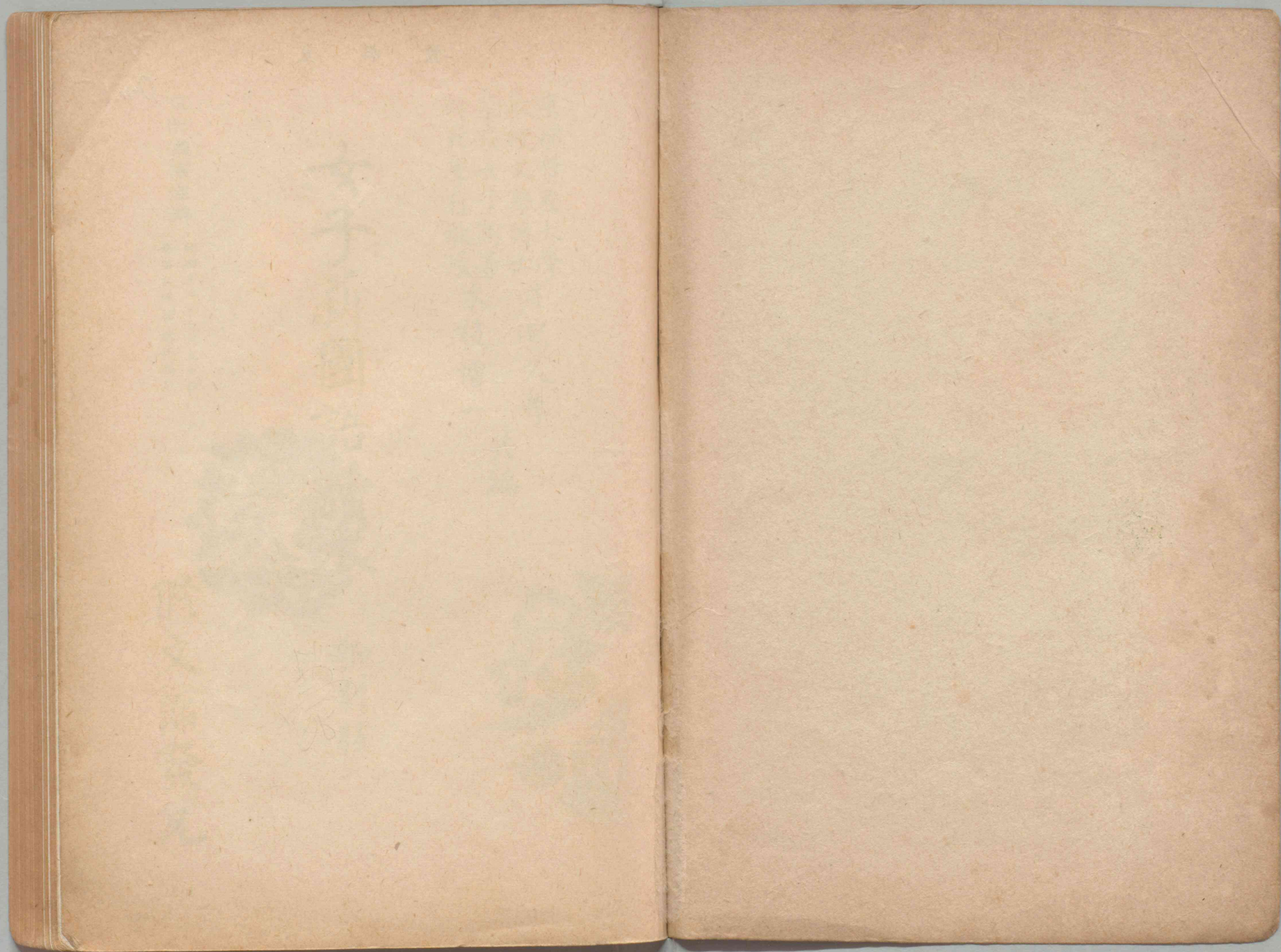
375.9
0m15
資料室

女子新國語讀本

新制版

卷四





資料室

3959
Om15

京都帝國大學
教授文學博士 澤瀉久孝
奈良女子高等
師範學校教授 木枝增一
共編

女子新國語讀本

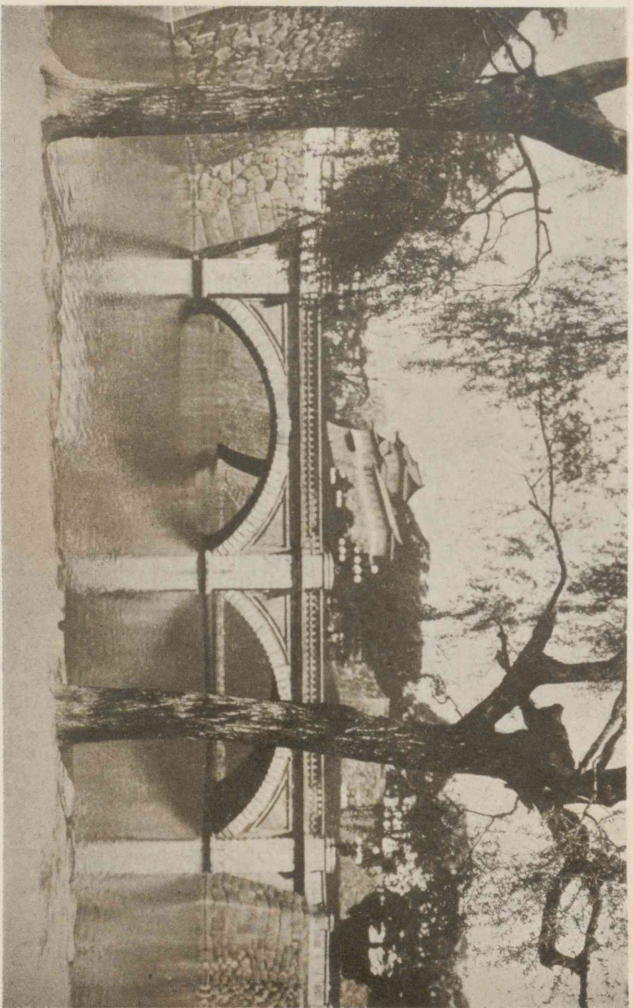
新制版

文部省檢定濟

昭和十六年七月三十日
高等女學校國語科用

修文館發兌



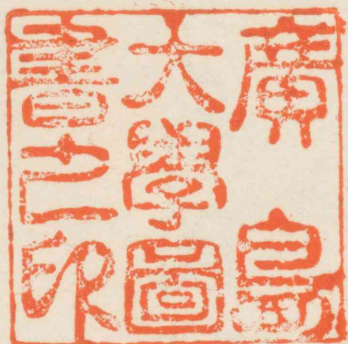


(照參課壹第)

橋

重

二



編纂の趣意

本書は、昭和十二年三月二十七日改正發布せられたる高等女學校國語科教授要目に則り、左の諸點に留意して編纂しました。

一 國民精神の體得——これに就いては、國體の精華、國民の美風偉人の言行を敍し、特に日本女子としての特性を養ふに足る材料を選定しました。

二 文學精神の涵養——これに就いては、國文學の本質に基づき、時に於ては古今、形に於ては様式の種々相に互り、心情を優雅ならしむべき材料を選定しました。

三 國語精神の把握——これに就いては、各教材が總べて醇正なる國語に採つてあるのは勿論、更に國語の正しい相を認識せしむると同時に、國語愛護の念を培ふに足る特別なる材料を選定しました。

右三點の外、世界の情勢を知らしめて圓滿なる國民的常識を養成するに足るもの、女子の本務たる家庭生活の趣味を向上せしめるに足るものをも加へました。

昭和十二年七月

木 枝 増 一
澤 瀉 久 孝

目次 卷四

書致

一	吾人の皇室
二	菊盛
三	文章の道
四	木犀の香
五	秋深い日
六	武蔵野の路
七	本居翁の遺蹟
八	本居宜長の母
九	菅公の夫人
一〇	蜜柑
一一	言葉の變遷

永田	秀次郎	一
北原	白秋	五
島崎	藤村	七
薄田	泣菫	三
室生	犀星	六
國木田	獨歩	六
芳賀	矢一	三
佐佐木	信綱	四
山田	新一郎	四
芥川	龍之介	毛
佐々	醒雪	奎

一	俳句に就いて
二	現代俳句抄
三	冬 青 樹
四	冬の日記
五	過と悪
六	伊達政宗
七	ボタンの穴
八	潮待つ間
九	春
一〇	路傍の草
一一	帯
一二	獅子と虎と私
一三	新聞の話

高濱	虚子	三
河井	醉茗	六
戸川	秋骨	六
貝原	益軒	六
新井	白石	一三
荻原	井泉水	一七
幸田	露伴	二四
前田	夕暮	二七
相馬	御風	二三
三浦	梅園	一九
今井	邦子	一四
鈴木	文史朗	一四

三 蘭學事始
六 清淨の國

杉田 玄白 一
大町 桂月 二

附録

國語假名遣表

常用漢字表

略字表

國字表

……終……



女子新國語讀本 新制版 卷四

口繪参照

永田秀次郎

兵庫縣の人、貴族院議員、青嵐と號し俳句を能くする、明治九年(三三)卒。

讚美する

夏

支那古代の國朝(凡そ西曆前三〇〇一同一六〇)。

一 吾人の皇室

永田秀次郎

「吾人の皇室は吾人の皇室である。決して他人の皇室ではない。他所の皇室ではない。故に、吾人ばかりがこれを讚美したい。吾人ばかりがこれを尊崇したい。さうして、他所の他人などには断じて手をも觸れしめるものではない。指をもさししめるものではない。」

夏の諺に曰く、「我が王遊ばずんば、我何を以てか休まん。我が王豫しまずんば、我何を以てか助からん」と。かくの如くに、

情緒
情誼

狂れる

キングジョージ

英國先々帝ジョージ五世陛下(西曆一九〇一年)

ロイドジョージ

英國の政治家、自由黨首領、元首相、西曆一九〇三年生。

併稱する

我が王、我が王と繰返していふところに無限の情緒が含まれて居る。「吾人の皇室」と吾人國民との間には、實に父子の情誼がある。その子より見たその父は、非常に尊く且偉いものである。さうして、何となく威嚴があつて、狂れ難い。それにも拘らず、又非常に親しく懐かしくて、一日と雖も離れて居ることが出来ない。實に吾人九千萬同胞の精神に宿る「吾人の皇室」なるものは、最も尊嚴にして且最も親愛なるものである。英國人は曰く、「英國に二人のジョージあり、キングジョージ及びロイドジョージこれなり」と。かくの如く皇室とその臣僚とを併稱するが如きは、我が國民性に於ては實に堪難き不快の言葉である。随つて、これを英人の如くに無

詔諛

理性

滅却する

流露

批判する

論難する

孔子

名は丘、字は仲尼、子といふのは尊稱、支那周代の聖人(西曆前五二〇年)

天成

守舊者流

雑作に他の物と比較併稱するは、吾人の感情に於て到底忍び難きことである。吾人のこの感情は決して詔諛ではない。又、理性を滅却したものでない。實に自然の性情の流露である。何人と雖も、その父を以てこれを他人に比較し、批判指摘して論難するを忍ぶことが出来ようか。もしかくの如き行爲を以て「直」なりとなす者があつたならば、必ず孔子に叱られるであらう。吾人は「吾人の皇室」を以て最も尊嚴なりとし、これをその父の如くに崇敬するが故に、決してこれを他の何物とも比較することを好まない。この熱烈なる國民的愛情は實に吾人の天成の特性であつて、以て英人と異なる所以である。

併しながら、吾人は又或守舊者流の如く、「吾人の皇室」の尊嚴

仰望する
文化生活

平易なる皇室論
永田秀次郎著、
我が國の皇室の尊
嚴なる所以を平易
に説いたもの、
大正十年(一九二一)
月刊行。

なる方面のみを知つて、親愛なる方面を遺れ、門を鎖し、簾を垂れ、障子を閉めて、我が親愛なる父を仰ぎ見るの機なからしめるが如きことは、吾人の熱烈なる愛情の到底堪へ能はざるところである。

「吾人の皇室は吾人の皇室である。尊嚴にして狃るべからざると共に、又親近にして離るべからざるものである。故に、吾人は嘗にこれを公儀の上に仰望するのみならず、吾人國民の經濟生活、文化生活の上に、常に吾人の父に親近すること愈深からんことを希望して止まぬのである。」

(平易なる皇室論)

北原白秋

名は隆吉、福岡縣の人、詩人、歌人、
明治十八年(一八八五)
生。昭和七年十月二日没

寂び
氣品

九重

賢所
みけはひ

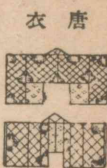
二 菊 盛

北原白秋

少女たち、黄菊には古代のかをりがある。
純粹に日本の寂びと氣品がある。
ああ、この静かな菊の香の苑に坐らう。

少女たち、黄菊には九重のみけしきがある。
雲の上の日と月のにほひもする。
わかい帝の御いきづかひが聞える。

少女たち、黄菊には御鏡の明かりがある。
森嚴な賢所のみけはひも澄む。



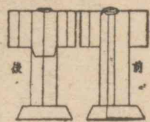
唐衣

紫宸殿
京都大内裏の正
殿、即位の大禮を
行はせられる御

黄櫨染
高御座



袍



儀仗兵
白秋全集
十八卷、北原白秋
の著作を集める、九
昭和四年三月九
月一昭和九年二月
四月一月刊行

皇后宮も白い唐衣でお出ましになる。

少女たち、黄菊には紫宸殿の午後が光る。

高御座の金の鳳玉旛の玉や、青地錦のきらりと輝く美人

かうくしい黄櫨染の御袍も拜される。やうに思ひます

少女たち、黄菊には聖駕の軋みもこもる。

儀仗兵の旗槍もちらくつぐく。

ああ、さうして日本の民族の新しい祝福が来る。

(白秋全集第四卷)

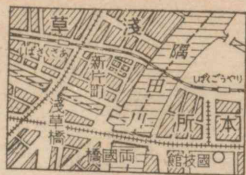
紫宸殿の鳥に天皇皇族大臣御官も、は外内

島崎藤村

名は春樹、長野縣
の人、詩人、小説
家、明治五年(三五三
三)生。

隅田川

東京市の中央を南
北に貫流する川
で、上流を荒川と
いふ。



優
板
水
子
瀬
に

三文章の道

島崎藤村

十七八歳の頃、私は隅田川でよく泳いだことがある。全く水には経験の無かつた私も、漸く岸を離れる事が出来るやうになり、次第に川の中流までも進み得るやうになつて、一夏水泳場へ通ふうちには、向かふの河岸まで泳ぎ越す事が出来た。更に又一夏も泳いで見たら、焦つて水ばかり飲んで居た頃によくも分からなかつた、水瀬の速い遅いも分つて來たし、眞水と潮流のまじり合つたあの川の中の冷たいと温いとも分かつて來たし、水鳥の様に浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の光景を、泳ぎながらに見る事も出來た。板子無しには溺れる外は無かつた私も、二夏の末には優に隅田川を往復した。私は普

浮身
拔手

通の泳ぎ手が行けるところまでは、自分も到達し得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことはなか／＼容易でなかつた。私の體は水に重かつたから、樂に浮身の出来る人を見たり、拔手の上手な人などを見た時は、全く感嘆してしまつた。文章の道にも、誰にでも到達し得られるやうな境地があるに相違ない。そして、「根氣」さへあれば、そこまで行くことは決して難くないに相違ない。

信州の小諸
信濃國(長野縣)、
北佐久郡小諸町、
信越線の一驛。

信州の小諸こもろに居た頃、私は弓を稽古したことがある。誰でも、最初のうちは、的に向かつて矢を當てることばかりを心掛ける。たゞ當りさへすればよい。さういふ時代には、幸に一本の矢が的に貫ぬくことはあつても、他の矢は思ひも寄らぬ

辨別する

場所へ飛んで行く。射手の心に頼むところも無く、矢の曲直を辨別する力も無く、さうして、幸に當つた矢は、高慢な煩はしい「熟練」を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得のある老人が私達の矢場へ來た。その老人が先づ「姿勢」を正す事を私達に教へて呉れた。それからの私達の矢は、假令的を貫ぬく事の出来ないやうな場合でも、一手揃て同じ場所に行くやうになつた。これは文章の道にも當筈めて見ることが出来る。唯好い文章をばかり作らうと思つて焦心することは、決して目的を達する道でない。眞に好い文章を作らうと思ふ者は、どうしても先づ「自己」から正してかゝらねばならない。

一手揃

焦心する

かたはら
掘堀

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て鋤を執つたことがある。読書のかたはら、よくその鋤をかついて行つて土を耕して見た。私は先づ荒れた畠の地面を掘起すことから始めた。土を碎いた。小石を擇りわけた。地ならしをした。汗を流してそれらの仕事をした。葱の苗や馬鈴薯の芽のやうな植易いものから作つて見た。その畠には、大根、白菜、茄子、豌豆、胡瓜などの類をも植ゑて見た。草を取りに行き、肥料をかけるに行つた。馬鈴薯の花が白くさかりな頃に行つて、試みに土の中を探つて見ると、はや圓いのが幾つも、根元の方から出て来た。豌豆の蔓が長く伸びて、人の背よりも高く絡みついた畠の中には、嫩かく生つたのを摘む鋏の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうにな

痛切に

嚴肅な

浅草

東京市浅草區。

新片町

浅草區の最南部にある。七頁の地圖参照

浅草橋

神田川の下流に架した橋。(地圖参照)

兩國橋

隅田川に架した橋、日本橋區から本所區へ通ずる。(地圖参照)

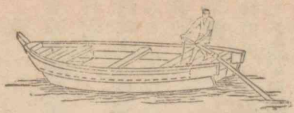
界限

つた。それから、私は、周圍にある耕地を見て廻り、本當の農夫の手で好く整理された畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に自分の身に感じられるやうになつた。私は、ある耕地を通つて、非常に嚴肅な念に打たれた事を、今でも能く思ひ出すことが出来る。われ／＼が文章の手本とすべきものは、何程われ／＼の周圍にあつても、それを悟らないことには仕方が無い。それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければならぬ。「試みる」といふことは、「悟る」といふことの初である。

浅草の新片町に住んだ頃、家は浅草橋や兩國橋に近くて、私

はあの隅田川の界限を漕廻つたことがある。最初のうちは

傳馬



弄する
表 白
結 晶
飯倉だより
鳥崎藤村著、感想
集、大正十一年二
月三九月刊行

無暗と手足を動かし、あの長さ一丈ばかりもある櫓を前へ押し、手許に引きして骨折つて見た。それでも舟は思ふやうに進まなかつた。次第に、私は、手足を動かすことが少くて、身體全體の力でゆつくりと櫓を押すことが出来るやうになつた。向かふから大きな傳馬がやつて來たぞ、あれの一つ衝當らないやうにと、さう思つて漕いで行く楽しみなども、それから起つて來た。その後、船頭のするところを見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには力の省略がある。「簡素」の美がある。文章の道にも、無暗に筆を弄することが決して自己の眞の「表白」とはならない。眞に好い文章には、眞に好い「結晶」の力がある。

(飯倉だより)

薄田泣菫

名は淳介、岡山縣の人、詩人、隨筆家、明治十年(三五)生。

江西詩社

黃庭堅を祖とする漢詩の一派。

黃山谷

黃庭堅、字は魯直、山谷は號、支那宋代の詩人(西曆一〇四一—一一〇五)。

晦堂老師(支那)
黃堂寺住職
久闊を敘する
をはる

四 木犀の香

薄田 泣菫

「いゝ匂だ。木犀だな。」

私は、縁端にちよつと爪立をして、地境の板塀越しに、一わたり見える限の近處の植込を覗いてみた。だが、木犀らしい硬い常緑の葉の繁みは、どこにも見られなかつた。この木の花が白く黄いろく咲盛つた頃には、一二丁離れたところからでも、よくその匂が嗅ぎつけられるのを知つてゐる私は、それを別にいぶかしくも、また物足りなくも思はなかつた。

名高い江西詩社の盟主黃山谷が、初秋の或日、晦堂老師を山寺に訪ねたことがあつた。久闊を敘しをはると、山谷は、待ちかねたもののやうに、

つかぬこと

吾隠スコト

「二三子、我ヲ以テ
隠スト爲ス、吾隠
スコト無シ。」論語
述而篇にある孔子
の言葉。

意見を叩く
もて扱ふ

「時につかぬことをお尋ね申すやうですが……」

といつて、「吾隠スコト無シ」といふ語句の解釋について、老師の意見を叩いたものだ。この語こそは、山谷が、その眞義に徹しようとして工夫に工夫を重ねたが、どこかにまだはつきりしないところがあるので、もて扱つてゐたものだつた。

晦堂は、客の言が耳に入らなかつたものの様に、何とも答へなかつた。寺の境内はひつそりとしてゐた。あたりの木立を透かして、そよ／＼と吹入る秋風の動きにつれて冷々とした物の匂が、開け放つた室々を、腹這ふやうに流れて往つた。

晦堂は靜かに口を開いた。

「木犀の匂をお聴きかの。」

山谷は答へた。

搏力

脈々と

「はい、聽いてをります。」

「すれば、それがその――」

晦堂の口もとに微笑の影がちよつと動いた。

「吾隠スコト無シといふものぢやて。」

山谷はそれを聞いて、老師が即答のあざやかさに心から感謝したといふことだ。

ふと目に觸れるか、鼻に感じるかした當座の事を捉へて、難句の解釋に暗示を與へ、行詰まつてゐる詩人の心境を打開して見せた老師の搏力には、さすがに感心させられるが、しかしこの場合、一層つよく私の心を牽くのは、寺院の奥まつた一室に對坐してゐる老僧と詩人との間を、煙のやうに脈々と流れて往つた木犀のかぐはしい呼吸で、その呼吸こそは、單に花木

高逸閑寂な

の匂といふばかりでなく、また實に秋の高逸閑寂な心そのものより發散する香氣として、この主客二人の思を淨め、興を深めたに相違ないといふことを忘れてはならぬ。

心像

交錯する

草木の花といふ花が、時にふれ、折につけ、私達の心像に残してゆく印象は、それ／＼の形と色と光との交錯したものに外ならないが、ひとり木犀は、その高い苦味のある匂によつてのみ、私達にその存在を黙語してゐる。木犀の花は、ぢゅむさく、

黙語する

ぢゅむさい

くゆらせる

香爐

開ける

秋がだん／＼開けゆくにつれて、紺碧の空は日ましにその深さを増し、大氣はいよ／＼その明澄さを加へてくる。月の

冷徹

漂渺たる

光は宵々ごとにその憂愁と冷徹を深め、蟲の音もだん／＼とその音律が磨かれてくる。かうした風物の動きを強く深く樹心に感じた木犀が、その老いて若い生命と漂渺たる想とをみづからの高い匂にこめて、十月末の靜かな日の午過ぎ、その

薫蒸する

たゆたふ

薫化する

獨樂園

薄田泣菫著、隨筆集、昭和九年三月巴四月刊行。

しるがね色の、またこがね色の小さな數々の香爐によつて、燃焼し、薫蒸しようとするのだ。匂は木犀の枝葉にたゆたひ、匂は木犀の東にたゆたひ、匂は木犀の西にたゆたひ、匂は木犀の南にたゆたひ、匂はまた木犀の北にたゆたひ、はては靡き流れて、そことしもなく漂ふうちに、あたりの大氣は薫化せられようといふものだ。さうして、草の片葉も、土にまみれた石ころも、やがてまた私の心も……。

(獨樂園)

室生犀星

名は照道、金澤市の人、詩人、小説家、明治二十二年(一五五)生。

五秋深い日

室生犀星

旅行をしてゐると、秋が来て、それがだん／＼深くなるのが、一日づゝ眼にとまつて来る。

ことに永い夏の旅住居から秋になると、著しく心にさびしさを感ずる。朝ごとに庭を掃くと、落葉のあひだに、赤蜻蛉や蝶の弱つてゐる姿を見かけるし、そんなことで日増しに深くなる秋が感じられる。或朝なぞ、どういふ小鳥だかわからないが、脱毛が一本、柴のうへに落ちてゐた。脱毛は尾の羽根らしく、明方に渡る小鳥が落して行つたものであらう。手に取つてみると、灰色と薄墨色とがぼやけた斑點をつくつてゐた。一本の羽根にもていねいな造化があり、誰がしたといふこと

かきかき
ハシテ
ウズク
カウク
スケ
マフ
ハク
カク
カク

ぼやける
造化



(華堂玉合川)

秋

深

アリガタヤ

オグヤこの信州の山里
軽井澤である。

キヤリ

ソククヤ

セリむ

ハツカス

もないところに有難さがあつた。

この信州の山里は風がすくないので、風の音があまりしな
い。穏かで静まり切つたなかで秋が刻まれる。畑の胡瓜を
みんな食べてしまひ、から／＼になつた棚や添竹をとりのけ
ると、その枯葉の下に一杯のこほろぎが潜んでゐて、驚いてば
らばらとあたりに跳び出す。眼の玉がびか／＼に光つてゐ
るのが、朝日にちらつく。さうして、あたりに散らばつた落葉
の上に跳ぶものだから、あちらでもこちらでも淋しい音がす
る。こほろぎらしくない大きい音のやうに聞える。

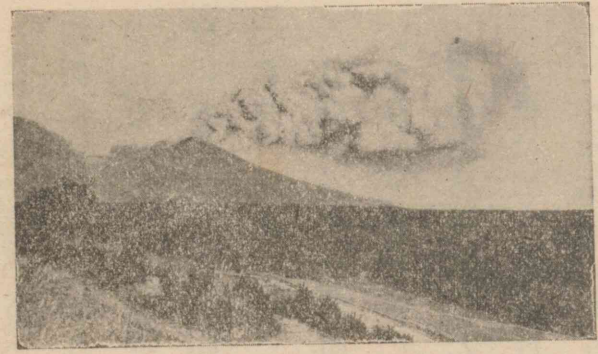
何處かに人の話聲が大きく聞える。すぐ近いところのや
うであるが、ずつと向かふの、町はづれてしやべつてゐるらし
いのだ。今朝はじめて霜が降つたと言つてゐる。さういへ

カシノケイ
ナス
ヒワれた
カラシツケ
メカ
イツバ
トツセン
ゴマツブ
マ
サツ

ば、今朝寒暖計を見ると四十八度しかなかつた。昨夜の寒さがはじめてわかつたやうな気がした。
畑の茄子もついでに引く。
干割れた固い茄子があちこちの枝のさきに實のつてゐる。芥子漬にするのだと、妻がいふ。茄子はかれこれ目籠に一杯あつた。

妻と女中が枯枝をさがしに裏山にのぼつてゆく。昨夜の風で古い枯枝が木の間から落ちたのだ。女たちは突然大きな叫び聲をあげて驚く。その聲の方に眼をやつて見ると、山鳥が一羽、木の間からぱたぱたと立つて行く。
渡り鳥がこの間から毎朝ついでに空に群をつくつて渡つてゐた。胡麻粒を撒いたやうに美しかつた。何百といふ小

シヤ
カセツホ
カラツツ
ハウ
キモ
ミ
サ
サン
ア
はいる(はひる)



鳥が一どきに轉り、羽根が風のやうに鳴り廣がるかとおもふと圓をちぢめて行つたりした。その速いことは瞬きするまに見えなくなつてしまふ。
渡り鳥が来ると東京では茶の花が咲くころである。
この信州では紫苑が咲き、茅の穂が山ぼろろになり、落葉松の針葉が散りはじめる。落葉松の枯葉は、帽子や著物の袂や障子の棧や疊の目まではいりこむ、それほど細かい。風呂桶の水に浮いてゐるのを見ると、信州の秋深いことが肌に感じられ

五ヶヶヶ
カスガ
ビョウ
ヤサ
タバ
コ
フシ

浅間山

長野・群馬兩縣に
跨る活火山、海拔
二五四二米。

上州

上野國(群馬縣)。

た。

白い浅間砂のうへに、落葉松の枯葉が粉のやうに、道ばたの
兩側に吹きよせられる。すこし風があると、風のなかに枯葉
が幽な栗いろを見せて散るのが見えた。その目にはいるか
はいらないくらゐ幽なのが、淋しいといふよりも微妙な景色
であつた。

秋深い日の浅間山はよく晴れて、優しいまんまるい肩をそ
びやかしてゐた。

「お山が煙草をのんでゐるわよ。」

子供がさういふほどの、幽な穩な噴煙を、今朝は上州の空の
上になびかしてゐた。煙草のやうに白つぼく淡々しい煙で
あつた。

挽白



茶微塵

シユウ
ヒキウ
タマ
ヤナリ
ヒキ
ヤク
ウク
ハク
ヤ
ル
チヤ
ミ
オト
ミカ
ハ
リス

去年とその前の年は、終日挽白を廻すやうにごろ／＼山鳴
りがしてゐた。時々、砂がうどの木の廣葉の上に黒々と溜つ
た。東京から來た避暑客の若い女たちは、その燒砂をあつめ
て紙にくるんで、都に持つてかへつて行く程であつた。
だが、今年夏から一度も爆發もしなければ、噴煙も極めて
すくなかつた。まんまるい山肌は、秋になつて裾野の方から
だん／＼茶微塵の著物のやうな色になり、それに、このごろは
濃く紅葉した朱の色が雜つてゐた。もう一度その色が灰ば
んで紅葉が散つてしまふと、間もなく冬が訪れて來るのであ
つた。山肌はまるで磨いたやうな新雪に粧はれるのだ。
今朝、裏山の高い落葉松の枝をちよろ／＼這ふものがある
ので、よく見ると茶色をした栗鼠であつた。ちよろ／＼這う

コフイ
クヌキ
ミンと
キツキ



啄木鳥

モズ
イッパイ
ナク
コメ
コケ

てみると鈍いやうであるが、少しも眼をはなさずにも、あまり速く枝を移つて行くので、栗鼠の姿よりも枝の動くのが眼にはいるくらゐであつた。落葉松から櫟の枝にうつり、枝の裏側に廻つた處で見失うてしまつた。あとは森としてゐて、啄木鳥がかん／＼……と木の幹を叩いてゐるばかりである。もちろんどこにゐるか姿は分からない。唯、木の幹をくちばしで叩く音がまつすぐに落ちてくる。静かだ。
向かふの林でクキ、クキ、クキ……と鶇の聲がする。まるで高原一杯にその聲がひびく。鶇といふ鳥は、きまつて枯枝にきよとんと止つて、二三度啼くと、それきり何かにびつくりしたやうに飛んで行つてしまふ。
米は裏庭で焚くのだが、今日は風がないので煙が庭の木の

サンキ
カス
トラフ
ウシオケ
カケ

文藝林泉
室生犀星著、隨筆
集、昭和九年二月
四五月刊行。

間を單める。飯の匂がまじつてくる。枯木のくすぶる匂のひま／＼に、飯がだん／＼烈しく焦げてくるやうに匂ふ。かぐはしくてよい。
「飯が焦げてゐるよ。」
女中は座敷を掃いてゐるので、大きな聲ではあい——と言つて裏庭へ行き、薪を引いてゐる。飯は薪で焚くと、ふつくりと一粒づゝふくれあがつて、つや／＼したつやをもち、心から柔くほた／＼にうまくなる。東京では瓦斯で焚くのであるから、こんな白い頬の様な飯はとても食べられなかつた。
それに山里で水が冷たく美しいから、豆腐がうまかつた。石桶に笥の水がしたゝり、豆腐は絶えず代へられる水のなかで、冷えて、生きてゐるやうに底の方に沈んでゐた。
(文藝林泉)

國木田獨歩

名は哲夫、千葉縣の人、小説家、明治四十一年(一九〇六)歿、年三十八。

武藏野

關東平野の一部、武藏國及び神奈川縣の一部、狭義には埼玉縣川越市以南、東京府中野原野を指す。



隨所に

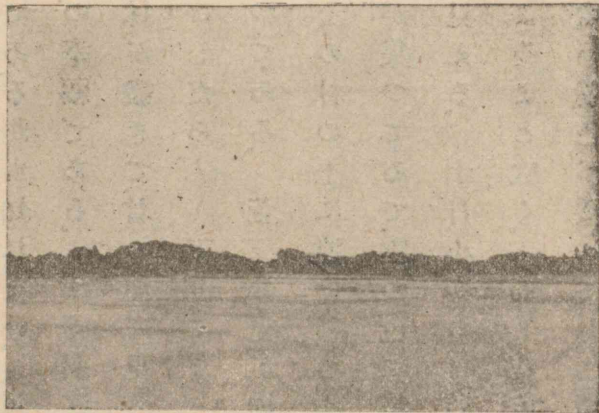
六 武藏野の路

國木田獨歩

武藏野に散歩する人は、路に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも、足の向く方へ行けば、必ず其處に見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武藏野の美は、たゞ縦横に通ずる數千條の路を當もなく歩くことによつて、始めて獲られる。春夏・秋冬・朝晝夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、たゞこの路をぶらぶら歩いて、思ひつき次第に右し左すれば、隨所に我等を満足させるものがある。これが實に武藏野第一の特色だらうと、自分はしみじみ感じてゐる。武藏野を除いて日本にこのやうな處が何處にあるか。北海道の原野には無論のこと、那須野にもない。その外どこにあるか。

那須野

栃木縣の北部、那珂川の上流及び碓氷川沿岸の廣漠たる平野。



武藏野

林と野とがかくもよく入亂れて、生活と自然とがこの様に密接してゐる處が何處にあるか。されば、君若し一の小路を歩き、忽ち三條に分かれる處に出たなら、困るには及ばない。君の杖を立て、倒れた方へ行き給へ。或はその路が君を小さい林に導く。迷はず行き給へ。林の中程に到つて、又二つに分かれたら、その小さい路を選んで見給へ。或はその路が君を妙な處へ導く。それは林の奥の古い墓地で、苔蒸す墓石が四つ五つ並んで、その前

叢(又)

杜—森

小春

に少しばかりの空地があつて、その横の方に女郎花など咲いてゐるかも知れない。頭の上の梢で小鳥が鳴いてゐたら、君の幸福である。すぐ引返して左の路を進んで見給へ。忽ち林が盡きて、君の前に見渡しの廣い野が展ける。足許からすこしだら／＼下りになり、萱が一面に生え、尾花の末が日に光つてゐる。萱原の先が畑で、畑の先に背の低い林が一叢繁り、その林の上に遠い杉の小杜もりが見え、地平線の上に淡々しい雲が集つてゐて、雲の色に紛ひさうな連山がその間に少しづゝ見える。十月小春の日の光が長閑に照り、小氣味よい風がそよそよと吹く。若し萱原の方へ下りて行くと、今まで見えた廣い景色が隠れてしまつて、小さい谷の底に出るだらう。思ひがけなく、細長い池が萱原と林との間に隠れてゐたのを發

見する。水は清く澄んで、大空を横ぎる白雲の斷片を鮮に映してゐる。水の邊には枯蘆が少しばかり生えてゐる。この池の邊の路を暫く行くと、又二つに分かれる。右に行けば林、左に行けば坂、君は必ず坂を上るだらう。とかく武藏野を散歩するのに、高い處／＼と選びたくなるのは、何とかして廣い眺望を得たいと求めるからで、それでゐて、その望は容易に達せられない。見下すやうな眺望は決して求められない。それは初から諦めたがいゝ。若し君が何かの必要で路を尋ねたく思ふなら、畑の中にある農夫に訊き給へ。農夫が四十以上の人であつたら、大聲を揚げて尋ねて見給へ。驚いて此方を向き、大聲で教へてくれるだらう。若し少女をとめであつたら、近づいて小聲で訊き給へ。若し若者であつたら、帽子を取つて

大様に

すげなく

黄葉―紅葉

慇懃に問給へ。大様に教へてくれるだらう。怒つてはならない、これが東京近在の若者の癖だから。教へられた路を行くと、路が二つに分かれる。教へてくれた路は餘りに小さくて、少し變だと思つても、そのままに行き給へ。突然、農家の庭先に出るだらう。果して變だと驚いてはいかぬ。その時、農家で尋ねて見給へ。「門を出るとすぐ往來ですよ。」と、すげなく答へるだらう。農家の門を外に出て見ると、果して見覚えのある往來だ。なる程これが近路だなど、君は思はず微笑をもらす。その時、始めて、教へてくれた路の有難さが解るだらう。眞直な路で、兩側とも十分に黄葉した林の四五町も續く處に出ることがある。この路を獨り靜かに歩むのはどんなに樂しからう。右側の林の頂は、夕陽鮮に輝いてゐる。折々落葉

山鳩



妙

の音が聞えるばかり、四邊はしんとして、いかにも淋しい。前にも後にも人影が見えず、誰にも遇はない。若しそれが木の葉の落盡くした頃ならば、路は落葉に埋れて、一足毎にがさかと音がする。林は奥まで見透かされ、梢の先は針のやうに細く蒼空を指してゐる。猶更人に遇はない。愈淋しい。落葉を踏む自分の足音ばかり高く、時に一羽の山鳩の遽しく飛去る羽音に驚かされる。同じ路を引返して歸るのは愚である。迷つたところが、今の武藏野に過ぎない。まさかに行暮れて困ることもあるまい。歸りもやはり凡その方角を定めて、別の路を當もなく歩くが妙。さうすると、思はず落日の美觀を獲ることがある。日は富士の背に落ちようとしてまだ全く落ちず、富士の中腹に群る雲は黄金色に染まつて、見るが

暗澹たる

沁—泌

山は暮れて

谷口蕪村の句。

武藏野

國木田獨步著、小品集、明治三十四年(三十五)三月刊行

よもすがら

獨歩はこの歌を「武藏野」の中に引いて、武藏野の冬の生活をして見てこの歌の心が分かつたと言つてゐる。熊谷直好は近世末期の歌人「浦のしほ貝」はその家集である。

中に様々の形に變ずる。連山の頂には白銀の鎖の様な雪が次第に遠く北に走つて、終に暗澹たる雲の中に没してしまふ。日が落ちる。野には風が強く吹く。林は鳴る。武藏野は暮れようとする。寒さが身に沁む。その時は路を急ぎ給へ。顧みて思はず新月が枯木の梢の横に寒い光を放つてゐるのを見る。風が今にも梢から月を吹落しさうである。突然また野に出る。君はその時、山は暮れて野はたそがれの薄かな」の名句を思ひ出すだらう。

(武藏野)

よもすがら木の葉かたよる音きけばしのびに風の
かよふなりけり

(熊谷直好「浦のしほ貝」)

七 本居翁の遺蹟

芳賀 矢一

薄寒い朝風に面を吹かせて、野山の景色を眺め行く楽しさ。早稻田は既に刈盡くしたが、晩稻田は金色に波立つて、豊年の喜を見せてゐる。一里以上の路を往復するらしい一年生くらゐな小兒の連立つて行くのも、勇ましく心地よげに見える。尾花や野菊の交つてゐるまばらな小松原の路を通つて、やがて喬松の亭々と聳えた山の麓を過ぎる。あの山は何、この山は何、御墓はあそこの山の茂みの所です。」と車夫の語るのを聞きながら、何時しか山室に著いた。
車を捨てて爪先上りの坂路を上つて行く。繁つた木の間を流れる溪流の音、都に馴れた目や耳には清らかに珍しい。

ウスラサムい
ワセダ
スデに
カリツク
オクテダ
ホウケン
ソウフク
フバノギク・マヅル
コマツ・ハラ
クワシヤ
ライ
ソビエタ
シヤ
ヤムロ
ツマヤチ
サカミ
シゲ
ケイリユ
ナれる

山室
町
爪先上り

ダダラ、
シヤボドシユウ
ムララケジ
クワンタイ
ツツラオリ
アヘぐ
モリツチ石 礎
オクサキ
ボヤスル
ボヤキ
ウシ
ボツゴ
セイゼン

社 殿

この墓側に山室山
神社があつたが、
明治二十三年(三五)
殿町に遷した。
(四〇頁参照)
平田篤胤
出羽國(秋田縣)の
人、國學四大人の
一、天保十四年(三五)
(三)歿、年六十八。
行かなん

杉松しひなどで小暗い路を凡そ四五町も上つた所に、浄土宗の寺がある。妙樂寺と言つて、翁には深い關係のある寺である。それから、右へ左へと九十九折を喘ぎく、六七町も上ると、古い木の鳥居があつて、十數段の石礎の上、二三十坪くらゐが平地になつてゐる。その中央の小高い盛土が即ち翁の墓である。上に櫻の木が一本、「本居宣長之奥墓」と題した墓石がある。社殿も何もない。翁の墓の左手に圓い石があつて、平田篤胤大人の
なきからはいづくの土になりぬとも魂はおきなのも
とに行かなん
と、刻んだのが立つてゐる。
篤胤大人は翁の歿後の門人で、生前に教を受けられた事は

ことば 宣長

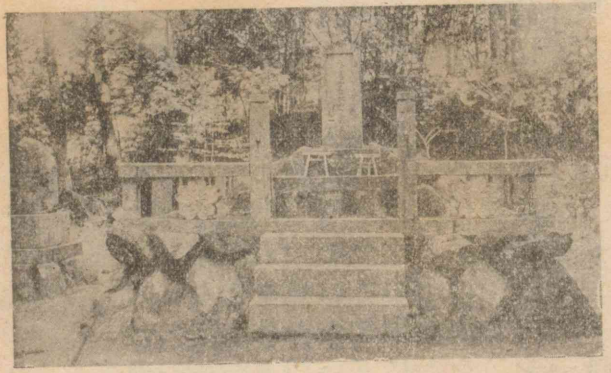


宣長翁の遺蹟
宣長翁の遺蹟
宣長翁の遺蹟

本居宣長像

アマタ
モンライ
ソバにハ
ミソク
カシヨ
モクジメ
コシヤイ
ヤンテ
シヤクダ
ジュウ
アテ
チレソク
ヨセ
コウ
シヨセ
ネンライ

懇請する
選定する
珍藏する
しむ
風に知られぬ花
後進



本居宣長の墓

ない。しかも、數多の門弟子のうちで、ひとり翁の傍に侍つて

をられるのは、さぞかし満足な事であらうと思ふ。この墓所はかの妙樂寺の持地面であつたのを、翁が懇請して、生前に選定して置かれたのである。その承諾を喜んで住僧に宛てられた手紙は、今尙同寺で珍藏してある。

十年來、一日として翁の書物を讀まぬ事の無い後進の一書生

スカブク
カンガイ
ムリヤウ
モトセ
ヘダフ
子ヨシヨ
ガクジエウ
カケ
カケ
カンカヨク
ミライ
エイゴウ
見はるかす
志摩
三重縣の東南端
三河
愛知縣の南半
尾張
松阪町
愛知縣の北半
現松阪市
奥城
マコト
バンヨ

が、今始めて翁の墓前に額づいて、感慨は眞に無量であつた。百歳の世は隔つれど教へ子にかずまへませと拜み額づく

翁が歿後の門人は幾百萬の多きに上つてゐるであらう。その著書の卓絶な學術上の價値と、偉大な感化力とは、未來永劫に、歿後の門人を作りつゝあるのである。世に學者の事業ほど偉大なものはない。

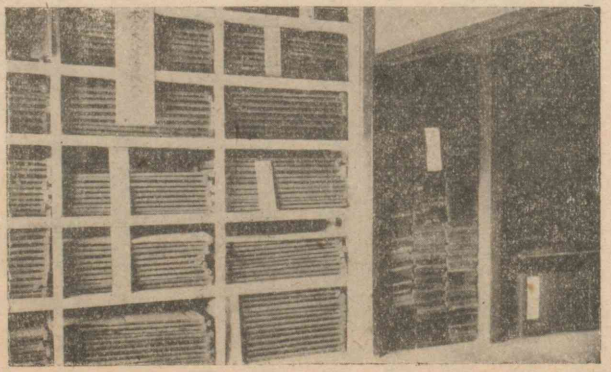
この墓所は山の頂にあるので、眺望の美しさは比類がない。青々とした伊勢の海を見はるかして、志摩三河尾張などの崎嶇、山々、近くは松阪町を眼下に見る。「富士の山も何時もは丁度あのあたりに見えます」と、ホテルの主人は指さした。千古に卓越した偉大な學者の奥城（奥城）としては、誠にふさはしい場所

イツクイ
シヨアク
サンバイメイトボ
コニヤ
ソセン
カレナデラ
ジャヤレ
マツサカ
コウエン
コ
スガヤチホク
チウタク
ホクソン
サワゴ
ジヒツ
サワゴウ
コアイ
コゲウヨウ
クスリバコ
チンレツ
コウホク
ダイネイ
キレイニシタメ

である。

妙樂寺に入つて一憩し、翁の書幅を拜し、參拜名簿に記入などする。此所の眺望も誠に美しい。元來、翁の祖先の檀那寺で、翁はをり／＼此所に遊ばれたのである。

松阪へ歸つて城址の公園に行く。此所に鈴屋遺蹟保存會があつて、翁の舊宅がそのまま保存されてゐる。又新しい倉庫には、翁の自筆の草稿、遺愛の物、醫業用の藥箱なども陳列されてゐる。どの稿本も丁寧に綺麗に認めてあつて、翁



部一の版木書述著長宜居本

キンベントクガク
エリをタダサ

クワヤイ 襟を正す

オソレ

魚町

シカシ 松阪市

ジエモク 舊態

オチイシ 本居清造

イサウ

キウタイ 今の戸主、翁五世

ヘウサツ の孫、明治六年三

ズシヨ 壽生

グロドコロ 抽斗

ユナ

ヒナダシ ハシゴダン

シヨサイ

ツナグカ ろ

モザウヒシ ケンレツコ

ジエツサク

マヒオコ

タエガタ

シツツ

イヘキ

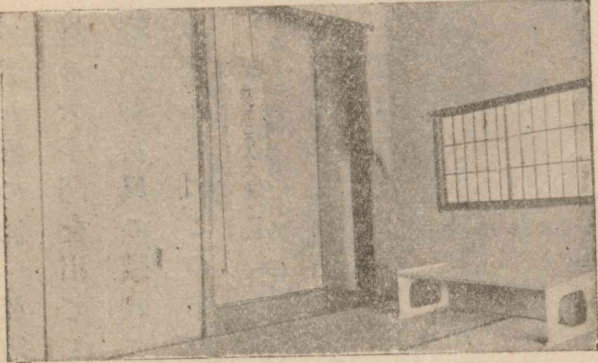
イヨ

ジンカリ

が四十餘年の勤勉篤學、人をして襟を正さしめるに足る。舊宅はもと魚町にあつたのを、市中は火災の虞もあるから、保存會でこの舊城址の一角に移したのである。併し庭の樹木置石迄一切舊態を存する様苦心したといふ事で、本居清造といふ表札まで、そのまゝになつてゐる。臺所のかまども、井も、便所も、舊のまゝの形が遺されてゐる。下が抽斗になつてゐる小さい梯子段を上ると、二階が四疊半の書齋、その床の柱に三十六の鈴が六つづつ六段に繋がれて懸つてゐる。(これは模造品で、本品は陳列庫にある。)これが即ち翁が一切の著書を述作された場所、この四疊半から日本全國を吹靡かす風が舞起つたのである。西向の窓から射しこむ夕日は、さぞ堪難かつたらうと思はれて、この質素な家居の様が、愈翁の人格を

シツツボク
ジヤウタイ
タイヒ
ワイマール
ドイツの都會
シツツボク
ゲエテ
ドイツの大詩人
ヨロコバ
西暦一八三三
シボウ
シルレル
ドイツの詩人(西
暦一七九一—一八〇五)
クワヤイ
ゼツツ

豁然
パノラマ
野外高所から四方
を展望すると同
じ感覺を興へる寫
生的繪畫を裝置し
たもの。



本居宣長の齋

大ならしめる。ドイツのワイマールでゲエテやシルレルの舊宅を見た時にも、その偉大な事業と、その質朴な家居の状態との對比を面白く感じたが、この鈴屋の遺蹟には、一層その感を深うした。ゲエテ、シルレルの舊宅を見た時には、日本にもかういふやうに偉人の遺蹟を保存したいものだと思つたが、今やそれが實行されて、先づこれを翁の舊宅に見る事を得たのは、誠に悦ばしい事である。

この公園は四望豁然、パノラマを見る様で絶景であるが、翁

スウカウ
ホヤン
ホコリ
オホニエモン
ケンシヤ
ミヅグキ
ヤウレキ
ジンカウ
ヒトシホ
ユルビヨリ
ウアラカ
カヘリヤ
サ人バ

山室山神社
今は本居神社といふ、松阪殿町。

大手門
瑞籬
返り咲
東郷大將

東郷平八郎、鹿兒島縣の人、元帥、海軍大將、侯爵、昭和九年(一九三四年)薨、年八十八。

筆のまにく
芳賀矢一著、隨筆紀行集、大正四年(一九一五年)五月刊行。

の遺蹟を移して、更に崇高な威嚴を加へた。我が國に翁あるは我が國の誇。松阪町民の誇は、翁の遺蹟に越した物はない。城の大手門を出でて數十歩、縣社山室山神社がある。社殿瑞籬が神宮風の様式であるのは、一入嬉しく感じた。小春日和の麗かさに、このあたりの櫻の木が幾本となく返り咲をしてゐる。宿の主人の話に、先年東郷大將の來られた時も返り咲を見られて、流石に本居翁の郷土故、櫻は一年中咲くのだらう。」
と言はれたといふ事である。
ありける

(筆のまにく)

ジツツ
シヨクシヤ
トシ

佐佐木信綱

號は竹柏園、三重縣の人、歌人、國文學者、文化勳章拜受者、文學博士、明治五年(一八七三年)生。

刀自

ツイタケ
キウカ
モクシヤ
イトナ

寶永二年
紀元二二六五年

明和五年
紀元二四二八年

八 本居宣長の母

佐佐木信綱

偉人の後には賢い母があるといふ事實を最もよく示してゐる例は、徳川時代の諸學者の傳に多くこれを見るが、中でも最も著しいのはわが本居宣長の母刀自であらう。自分はここに宣長の母勝子刀自について些か語つて見よう。勝子は、寶永二年四月十四日、伊勢國松阪新町の村田孫兵衛豐商トヨシヤの四女として生まれ、享保十三年、二十四歳で小津三四右衛門定利の妻となつて、二男二女を生んだ。その長男が宣長である。元文五年三十六歳の時に夫におくれ、明和五年正月朔日、六十四歳で世を去つた。
小津家は松阪の舊家で、江戸に出て木綿問屋を營んでゐた。

ソウワリフ・ソフ
 ナウケウ
 ネツシン
 ゲウム
 テガイ
 マヤマらぬ大傳馬町
 シヤン
 ビナウボツ
今の東京市日本橋
 区内。
 ガイサイヤク
 ナウレン
 ナサン、ウヅカ
 シンセキ
 ホクタン
 キウヨ
 セイワイ、オレン
 クワイク
 シシヨ
 ジンジャウ
 フジン
 ホトン、ゾ
 スベ

手代
 宣長の曾祖父祖父相次いで商業が大いに榮え、父三四右衛門之をうけついで熱心に業務に従つたが、手代のために誤られて資産を失ひ、三四右衛門は四十六歳の七月に江戸大傳馬町の店で病歿した。
 三四右衛門の死は、いふまでもなく小津家即ち本居家にとつては大災厄であつた。養嗣子定治は江戸にあつたが、それもまた數年の後に世を去つた。遺産としては僅かに四百兩あつたが、それも親戚に保管されて、僅かにその利子が給與されるだけであつた。この間にあつて、勝子は、一家の生計を維持すると共に、宣長を始め子女の教育を全うしなければならなかつた。尋常の婦人ならば殆ど手足を出す術も知らないで、茫然自失すべき窮境であつたのである。ところが、勝子は、些

ボウゼン、ジンシツ
 キヅキヤウ
 ラウハイ
 サイレン、ジリヨ、マイピン
 バン、タン
 フ、シ、イ
 ワイ、エイ
 時宜を得る
 センケン、シヤウ
 マイ、サダ、シキ、エ、エ
 タイト、ケム、ム、イ
 ナチフ、カン
 ミ、ウ
 フク、カ、サ、カ、カ
 未曾有
 キヨ
 ケン、ボ
 フウ、セ、キ
 ナウ、ニ、キ
 テン、アン
 シカ、モ
 ジュ、ン、ゼン
 純然たる

か、の狼狽もせず、細心な思慮と明敏な判断とを以て、雄々しくも一家の經營に當つた。
 こゝに特に勝子の大先見と稱すべきは、その宣長に對する明察と、時宜を得たその教育の態度とである。このことがあつて始めて我が宣長をして宣長とならせたもので、勝子の賢明は、よく本居一家を危急の間に全うするを得させたばかりでなく、更にまた、本居宣長といふ一大學者を生ぜさせて、日本の國家及び日本の學界に、未曾有の寄與をなさせたのである。賢母の功績もまた偉大であるといふべきである。
 何をか勝子の明察といふ。それは、彼女が、宣長は到底商人となるべきものではないといふ事を見抜いて、彼をして學者とならせ、以てその天分を成させようとし、而も純然たる學者

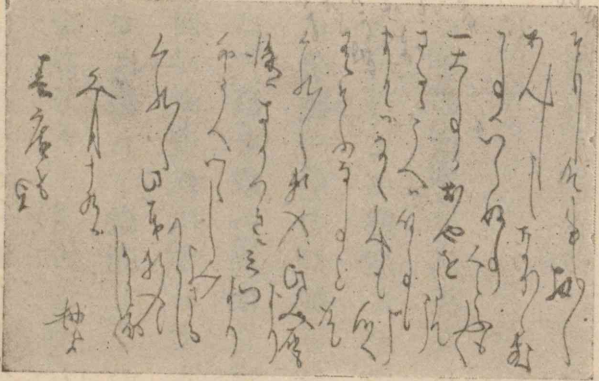
コレナン
セイケワツ
モトデ
元手
炯眼
イウケイ
ヤス
ホウシキ
リウガク
ツいて
ジユガク
キツ
堀景山
名は正起、儒者、
安藝(廣島縣)侯の
臣、寶曆七年(三四
七)歿。
武川幸順
號は南山、山城國
(京都府)の人、醫
者、安永九年(三四
〇)歿、年五十六。
留學
後顧の憂

の生活の困難な事を知つて、生活の元手を得る爲に、醫師とな
らせようとした事である。よくその子を見抜いた(炯眼)と共
に、また生計の點にも十分に心を用ひた勝子の先見と、悠々思
慮を盡くしたその態度とは、眞に及び易からずとすべきでは
ないか。
寶曆二年、宣長が二十三歳の春、勝子は宣長を京都に留學さ
せた。宣長は京都に上つて、まづ堀景山に就いて儒學を學び、
後に武川幸順に醫を學び、五年四箇月間留つた。この五年餘
の留學が、やがて宣長の學問の上にも、また生活のためにも基
礎となつて、宣長をして後年の宣長とならせたことは、宣長の
傳に於ける明白な事實である。この五年間餘、宣長をして何
等後顧の憂がなく、また、都會生活にありがちな數多の誘惑に

オチチラズ
クレン
ケキレ
ケワク
ヨク
ガクヒ
シベン
カクイ
シマヤチ
シヤクセン
クシヤン
ニヨリ
タトフ
シム
オキエ
ノハナ
セツク
エウキ
ヒヨウ

支辨する
そもじ殿事扱
あんじ申候ながな
が敷事はいらぬ事
くどふもく一大
事候おやをたて申
さるゝうへは何事
も申まではなく候
へども心へ有そふ
な事と存候くれぐ
れ頼入候此文届候
より後はさかづき
に三つより外うへ
つゝしみ申さるべ
く候くれぐ此義
頼入候めて度
かしく
母より
文月十九日
春庵老参る

も陥らずに、十分勉強することを得させたことは、全く勝子の
苦心と激勵との結果であつた。
さうでなくてさへ、困苦の中から
宣長を留學させて、學費を支辨し、又、
一家の經濟を立てて行く勝子の苦
心は、決して一通りではなかつた。
勝子は、或は家財を賣り、或は親戚か
ら借錢をなし、苦心慘憺してこれを
處理した。而も、彼女はその子に對
して、例へば、會ひたい情をも忍んで
歸郷を延ばさせようとしたやうに、常



簡書の子勝居本

もとより節約を要求こそはしたれ、必要の費用に對しては、常

カのキナ
キユウナ
グクガ
アイド
ウチアケ
イマシメ
サウケン
カウ
バトカイ
セヨコ
ジカク
タイシ
ネゴエ
モナウ
ハヤカ
ケイハツ
メウニ
ニヨカン
サア
ユウヨウ
クフ
ズク
カ
ヒトス
センイ
トリソ
ハツ
ホメ
タイ
ケイ
カ
タ
ケン
レ
カ
サ
コ

愚痴がましい
雙肩にかゝる
家運挽回
イッパン
妙諦

随分

に事を缺かさずこれを給して、決して愚痴がましいことをいはなかつた。併し、自分の苦心は或程度まで打明けて我が子を誠めた。さうして、宣長の日常生活につき、また勉強については、絶えず激勵し、その上、宣長の雙肩にかゝつてゐる家運挽回の大責任についても、自覺させることを忘れなかつた。或は大酒を戒め、或は食物に用心し、或は寝冷に氣を付けるなどは、勿論一般の母親氣質であらうが、我が子に對するその激勵と啓發との態度に至つては、眞に大なる教育の妙諦を得たものといはなければならぬ。勝子が宣長に與へた書翰の一つに、

「偕、何かと心づけ候へども、入用多く苦勞致し申し候。随分随分無事にて、心強く思ひ、外の儀に心移し申さず、唯々

タ
ヒトス
センイ
トリソ
ハツ
ホメ
タイ
ケイ
カ
タ
ケン
レ
カ
サ
コ

心にしむ
大文字
感應する

一筋に醫者の方心掛け申すまでは無く候へども、人間心一筋を強く道々を專一に成さるべく候。此所をそもじ取損ひ取外し申され候はば、いつも申す通り、一人の母此の世より迷ひ申すべく候。其の上、父母先祖の跡の所よく、心にしめ、專一に守り申さるべく候。人々そもじ事褒居り申し候へば、此所取損ひ候はば、親の恥は申す様なく、大不孝と存じ候。とあるが如きは、この點に關して最も敬重すべき大文字である。

勝子が當時の斯様な賢慮と苦心とは、素より、俊秀の子である宣長に感應せずにはゐなかつたに相違ない。併し、當時勝子から送つた書翰は數十通も残つて居るのに、宣長から對へ

シロガキ
ハンオウ
コウクワ
クイリヤウ
ゴジン
セイコウ
ソイン
ジニカク
タシビ
ワタ
スベマ
ヒツエウ
イジシ
マンバ
セツ
ジヤウ
ロンファン
子ニキ
カンコウ

賀茂眞淵と本居宣長
佐佐木信綱著、賀茂・本居の二大國學者の傳記・學問に關する論文集、大正六年三月至五月刊行。

たものは遺憾ながら殆ど傳はつて居らぬ。随つて勝子の心盡くしが、いかに宣長の心に反應したかは之を知り得ないが、併し、その反應の効果を明瞭に吾人に語る大なる事實がある。それは宣長の學者としての成功である。宣長をしてかやうな國學上の偉人とならせた素因は、多く之を勝子の人格に求めるべきである。宣長の學問と事業とを歎美するにつけても、吾人は必ず勝子の賢明を忘れてはならぬ。
いかなる國、いかなる代にも、總べての方面に涉つて最も必要とするところのものは大人物である。さうして、大人物を生ぜさせるには、その母が賢明でなければならぬ。吾人は今に於て、勝子を偲ぶ情が殊に切である。

(賀茂眞淵と本居宣長)

山田新一郎

福岡縣の人、元北野神社宮司、元治元年(一八六〇)生。

北野天満宮

官幣中社北野神社、京都市上京區にある。

菩提寺

寄寓する

昌泰二年

紀元一五五九年。

醍醐天皇

第六十代、御名は敦仁、延長八年(一一三六)崩御、御年四十六。
有數な

九菅公の夫人

山田新一郎

菅公の夫人は京都の北野天満宮の一座として祀られてゐる。夫人は菅公薨去の後には、住むべき家もなくなり、吉祥院といふ菅原家の菩提寺の一室に寄寓してをられたので、普通に吉祥女と稱へられてゐる。昌泰二年夫人の五十の賀の折、醍醐天皇がわざ／＼祝賀の敕使をお遣はしになつて、從五位下を―後には從四位下まで昇進せられたが―お授けになつたといふ外には、夫人の傳記は多く傳はらないが、當時有數な賢夫人であつた事は考へられる。菅公の御子方はなか／＼大勢であつたが、上の方の御子方は、四人までも菅公と同時に諸國に流された程、そろつて相當な位置に出身された所から

ろんけい
ナインジヨ
フツガ
延喜元年
紀元一五六一年
太宰権帥

ニハカ
太宰権帥
師一師
左選す
なわすれそ

セイセン
ヨモ
キンスツジヤウ

木ずゑ。

かへり見しはや

琴瑟の情

木ずゑ。

見れば、その訓育の功は、公一人だけには歸せられまい。夫人の内助も與つて力のあつた事と思はれる。

延喜元年一月二十五日、菅公が、俄に太宰権帥に左遷されて、二月一日都を立つて行かれる時、

東風吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそ

と詠まれたのは、梅花に寄せて最愛の夫人に別れを惜しまれたものとも言はれよう。西遷の途すがら、都への便りにこ

とづけて、君が住む宿の木ずゑを行くもかくるゝまでにかへり見しはや

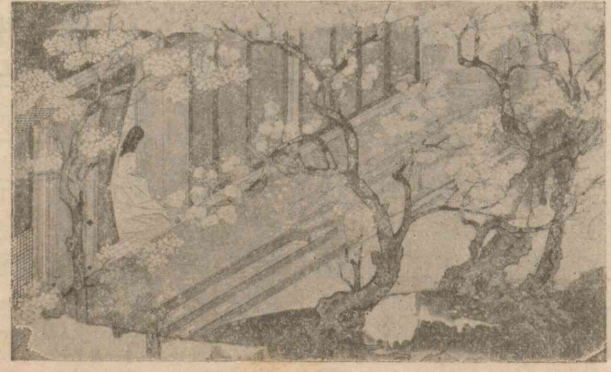
と盡きぬ名残を惜しまれたのも、即ち、この夫人に對してであつた。もつてその琴瑟の情もしのばれるのである。

ルステ
ウカ
ケツボウ
ヒサン
ク
オトラぬ
キヤウ
サウ
カボク
トウサン
シ
サウ
キツカ

雪押竹

掃撒ス

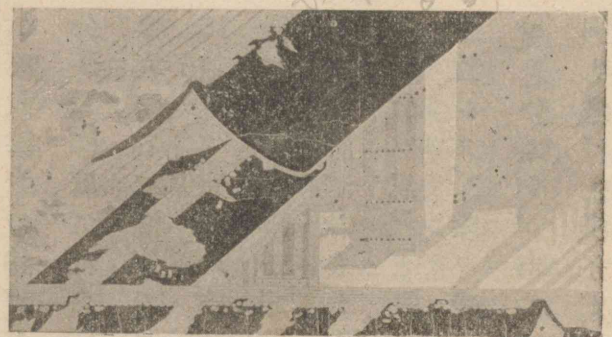
夫人が京都の留守邸に於ける、佗住居の様子は、菅公の作られた太宰府の詩で多少窺はれる。公が太宰府で衣食住共に缺乏し、悲惨極まる二箇年の月日を送られたに較べて、京都の方もまた劣らぬ境遇であつた事が想像される。菅公の太宰府で詠まれた詩のうち、「雪夜家竹ヲ思フ」と題して、「家僕ハ早く逃散シヌ。寒ヲ凌ギテ誰カ掃撒セシ」といふ句があつて、留守宅では下男も逃げた様子だが、雪押竹の雪を拂ひ除ける者もあるまいと、故郷の事を氣遣つてをられる。



(起縁神天崎ヶ松) 公 菅

イツワリ
ヤメ
シヨク
トケ
コウ
クンモン
キラク
カセイ
トノ

去年ノ今夜
去年ノ今夜清涼ニ
侍ス、秋思ノ詩篇
獨リ斷腸、恩賜ノ
御衣今コ、ニ在
リ、捧持シテ毎日
餘香ヲ拜ス(重陽
後一日)。陰曆ノ日
一朝にして
一食
權門



(起縁神天崎ヶ松) 門の家菅

この詩は延喜元年即ち、去年ノ今夜の詩を詠まれた年の冬の
作である。一朝にして右大臣を罷め
られ、食祿に離れ、しかも、大臣暮して育
つた御子たちは大勢ある。留守居の
夫人の苦勞が一通りや二通りでなか
つた事は、申すまでもあるまい。こん
な困難な家、しかも、お咎めを蒙つた菅
家の事であれば、はしたない下男ども
も早々に逃出して權門に走つたもの
と思はれる。夫人は、かゝる困難を凌
いで、御子方相手に留守を守つて公の
歸洛の日を待ち、氣丈夫に家政を齊へ、夫を大事に思つてをら

縁

ヤクジョ
躍如として

セウシク
セキレウ
ビンブウ
アウ
便風

れた事は、更に次に引く菅公の太宰府に於ける詩に躍如とし
て表れてゐる。これも延喜元年冬の作と思はれるが、家書ヲ
讀ム」と題してはいはく、

消息寂寥タリ三月餘
便風吹著ク一封ノ書

三月餘りも都の便りが絶えて、甚だ寂しく感じたが、今日は
いかなる吉日ぞ、東の風が我が家の手紙を吹きつけて來た、嬉
しい事である。

西門ノ樹ハ人ニ移シ去ラレ、
これから以下の四句は、夫人の送られた手紙の内容を詠ま
れたものである。右大臣家の表門内であれば、松か梅か立派
な樹が植ゑてあつたであらうが、今はそれを人が持つて行つ

ベイエンのシロ

米鹽の代

キキョ

コウバイゲン

シクヤ

ウリケヒ

チヨウワ

ナメ

チヨウワ

ヤクシヨ

ハクセン

サウコン・ホク

チヨウワ

フジ

カクシ

エイセ

ヒツ

天神御所
公の屋敷址を後世
天神御所といふ。

寵遇
斜ならず

配煎

たとある。多分米鹽の代に賣つたか取られたかしたのであらう。

北地ノ園ハ客ヲ寄居セシム。

天神御所の北地と言へば紅梅殿であらう。客を寄居せしむとあるから、借家か下宿に出されたものと見える。庭木の賣食に下宿業。これが昨日まで右大臣として天皇の寵遇斜ならなかつた菅公の夫人の生計の有様である。太宰府の菅公はどんな心持でこの手紙を読まれたであらうか。

紙ニ生薑ヲツツンデ藥種ト稱シ、

昔の草根木皮の藥には、生薑の配煎が必要とされたのであるから、いはゞ生薑は家庭衛生の必要品である。「たまに生薑が手に入りましたから、不時の用にと紙に包んで貯藏して置

荷もせぬ

イヤシ

コシヤ

コシヤ

カクシ

ベン

リウカイ

タケツツ

シンセ

セシヤ

シヤウ

セシヤ

ヒヤク

ハイ

コシヤ

チヨウ

セシヤ

チヨウ

セシヤ

チヨウ

セシヤ

チヨウ

セシヤ

齋備

總菜

神饌

千言萬句

凜乎たる

百難を排する

藥餌
齊家

きました。」困難のうちでも一物も荷もせられぬ夫人の用意の程が知られる。

竹ニ昆布ヲ籠メテ齋儲ト記ス。

内のお祭のお供物も十分には辨じかねる境遇である。珍しく昆布をもらつたからとて、御子方の總菜にもされず、直ちに竹筒に入れて、お祭の時の神饌の用にしまはれたといふのである。

以上の四句は、千言萬句よりも明らかに、京地に残された菅公一家の生活状態を菅公の筆で表してある。何たる悲惨な境遇であらうか。その半面には、夫人が凜乎たる決心を以て百難を排して生計の方法を講じ、缺乏のうちに祭事を大事にし、藥餌の果までも注意してをられる誠に行届いた齊家の有

キカレ
マウノウ
ウレフル
イタツラ
グキ
エイガク
ホウジ

懊惱ス

これ事とする
指を屈する
梅花遺芳
山田新一郎著、前
編菅原道真の詩歌
をあげてその遺芳
を偲び、後編菅公
夫人の徳をたへへ
る、大正八年（三毛
）五月刊行。

様が、あり／＼と見えるではないか。

妻子飢寒ノ苦シミヲ言ハズ。コレ還ツテ余ヲ懊惱セシ
ムルヲ愁フルガ爲ナリ。

留守宅の現状は前の如くであるが、それを唯その通りの事
實として報じただけで、その餘は、徒に夫を心配させまいとて
か、自分や子供の飢寒にせめられて困つてゐる愚痴は一言も
言うては來ぬ。言はないどころか、お留守はとにかくどうに
かやつてゐますと、却つて安心を求めて來る雄々しさは、なか
なか並々の婦人て出來る事ではない。榮華これ事とした當
時の婦人社會では、指を屈すべき第一人であつたであらう。
實に菅公の夫人たるに恥ぢない方と言へようと思ふ。

梅花遺芳

芥川龍之介

東京市の人、小説
家、昭和二年（三毛
）と歿、年三十六。

横須賀

神奈川県横須賀
市、作者は當時横
須賀海軍機關學校
の教官であつた。

ヒラウ
作者の心持のよき
ケレタ
描寫のすばれてゐる
エミケモリ
カワイトウ
倦怠
エウカ

一〇 蜜

柑

芥川龍之介

或曇つた冬の日暮である。私は横須賀發上り二等客車の
隅に腰を下して、ぼんやり發車の笛を待つてゐた。とうに電
燈がついた客車の中には、珍しく私の外に一人も乗客はゐな
かつた。外を覗くと、薄暗いブラットフォームにも、今日は珍
しく見送りの人影さへ跡を絶つて、唯、檻に入れられた小犬が
一匹、時々悲しさに吠立ててゐた。これ等は、その時の私の
心持と、不思議なくらゐる似つかはしい景色だつた。私の頭の
中には言ひやうのない疲労と倦怠とが、まるで雪曇の空のや
うなどんよりとした影を落してゐた。私は外套のポケット
へじつと両手を突つこんだまゝ、そこにはひつてゐる夕刊を

クツロキ、
 コトワク
 マチカラ、へる
 ヒヨリ、リタ
 カイサツ、
 シヤンヤヤ
 フ、ハ、シヤ
 フワタ、グシ、
 オモロ、ロ
 フ、ラ、フ
 カミ、
 イ、ア、ウ、カ、ヘ、
 アト、
 ヒ、ビ、
 ホ、
 ア、カ、

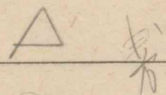


銀杏返し

友 友

出して見ようといふ元氣さへ起らなかつた。
 が、やがて發車の笛が鳴つた。私は、かすかな心の寛ぎを感じながら、後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずるずると後ずさりを始めるのを、待つともなく待構へてゐた。ところが、それよりも先にけたまほしい日和下駄の音が、改札口の方から聞え出したと思ふと、間もなく車掌の何か言罵る聲と共に、私の乗つてゐる二等室の戸ががらりと開いて、十三四の小娘が一人、慌しく中へはひつて來た。と、同時に一つづしりと揺れて、徐に汽車は動き出した。
 小娘は、油氣のない髪をひつつめの銀杏返しに結つて、横なでの痕のある輝だらけの兩頬を氣持の悪い程赤くほてらせた、如何にも田舎者らしい娘だつた。しかも、垢じみた萌黄色

モエキ、
 エ、リ、フ、キ
 ヒ、ガ、
 ナ、レ、
 フ、ロ、ミ、手、ツツ、ミ、
 カ、ヘ、子、
 フ、カ、サ、リ、
 フ、ケ、ツ、
 ワ、キ、マ、へ、め、
 オ、ロ、カ、
 リ、ン、ガ、イ、漫然と
 マ、ン、ゼ、ン、
 オ、ヒ、ヤ、カ、
 シ、キ、リ、ト、



の毛絲の襟巻がだらりと垂れ下つた膝の上には、大きな風呂敷包があつた。その又包を抱へた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事さうにしつかり握られてゐた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかつた。それから、その服装が不潔なものやはり不快だつた。最後に、その二等と三等との區別さへも辨へない愚な心が腹立たしかつた。だから、巻煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいと言ふ心持もあつて、今度はポケットの夕刊を漫然とひろげて見た。
 それから幾分か過ぎた後であつた。ふと何かに脅されたやうな心持がして、思はずあたりを見廻すと、何時の間にか例の小娘が、向かふ側から席を私の隣へ移して、頻りに窓を開け

ガラス
イヨイヨ
イナ
モクローン
ヒク
コサ
トシカ
サンタク
カ、いらす
ノミコめ
キマぐ
ス、セン
ケハ、い
タタハ、い
ア、セン

渾身
せはし
氣紛れ
悪戦苦闘する

ようとしてゐる。が、重い硝子戸は中々思ふやうに開かないらしい。輝だらけの頬は愈赤くなつて、時々涙をすゝりこむ音が、小さな息の切れる聲と一しよに、せはしく耳へはひつて来る。これは勿論、私にも幾分ながら同情を惹くに足るものには相違なかつた。併し、汽車がいま將に隧道の口へさしかからうとしてゐる事は、暮色の中に枯草ばかり明かるい兩側の山腹が間近く迫つて來たのでも、すぐに合點の行く事であつた。にも拘らず、この小娘は、わざ／＼しめてある窓の戸を開けようとする。その理由が私には吞込めなかつた。いや、それが私には單にこの小娘の氣紛れだとしか考へられなかつた。だから、私は、腹の底に依然として険しい感情を蓄へながら、あの霜焼けの手が硝子戸を開けようとして悪戦苦闘す

レイコ
ス、サ、し
ト、カ、す
モ、ウ
ミ、カ、ギ、子
ヒ、キ、子、毛
ト、シ、カ、ク
リ、ヨ、の、す

はためかす
さういふ
煙や埃の粉は
濛々と
やうす

る様子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈る様な冷酷な眼で眺めてゐた。すると間もなく、凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の明けようとした硝子戸は、たうとうばかりと開いた。さうして、その四角な穴の中から、煤を溶かした様な、どす黒い空氣が、俄に息苦しい煙になつて、濛々と車内へ漲り出した。元來咽喉を害してゐた私は、手巾を顔に當てる暇さへなく、この煙を満面に浴びせられたおかげで、殆ど息もつけない程、咳込まなければならなかつた。が、小娘は、私に頓著する氣色も見えず、窓から外へ首を延ばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛を戦がせながら、じつと汽車の進む方向を見やつてゐる。其の姿を煤煙と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る／＼明かるくな

ふつ

頭ごなしに

フミキリ

ワラヤ

カハラ

イナリ

モロ

ボシヨク

セウサク

サク

ナラ

ナラ

荒



つて、そこから土の匂や枯草の匂や水の匂が冷やかに流れこ
んで來なかつたなら、漸く咳きやんだ私は、この見知らない小
娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸をしめさ
せたに相違なかつたのである。

しかし、汽車はその時分には、もうやす／＼と隧道を迂りぬ
けて、枯草の山と山との間に挟まれた或貧しい町外れの踏切
に通るかゝつてゐた。踏切の近くには、いづれも見すばらし
い藁屋根や瓦屋根がごみ／＼と狭苦しく建てこんで、踏切番
が振るのであらう、唯一旒のうす白い旗が懶げに暮色を揺つ
てゐた。やつと隧道を出たと思ふ——その時、その蕭索とし
た踏切の柵の向かふに、私は、頬の赤い三人の男の子が、目白押
に竝んで立つてゐるのを見た。彼等は皆この曇天に押しす

目白押

蕭索とした

懶げに

一旒

揺る

暮色

を

揺

つ

て

い

る

の

見

知

ら

な

い

小

娘

を

頭

ご

な

し

に

叱

り

つ

スーサン

フウ

イッ

ア

リ

カ

イ

ホ

オ

ア

ノ

セ

リ

ヨ

ウ

カ

イ

ク

ワ

ガ

陰惨な
風物

喊聲



わざく

くめられたかと思ふ程、揃つて背が低かつた。さうして又、こ
の町外れの陰惨な風物と同じ様な色の着物を著てゐた。そ
れが、汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一齊に手を揚げるが早い
か、いたいけな喉を高く反らせて、何とも意味の分からない喊
聲を一所懸命に逆らせた。するとその瞬間である、窓から半
身を乗出してゐた例の娘が、あの霜焼けの手をつとのばして、
勢よく左右に振つたと思ふと、忽ち心を躍らすばかり暖な日
の色に染まつてゐる蜜柑が、凡そ五つ六つ、汽車を見送つた子
供達の上へばら／＼と空から降つて行つた。私は思はず息
を呑んだ。さうして、刹那に一切を了解した。小娘は、恐らく
これから奉公先へ赴かうとしてゐる小娘は、そのふところに
藏してゐた幾顆かの蜜柑を窓から投げて、わざ／＼踏切まで

報い(報いる)

見送りに来た弟達の勞ラバに報いたのである。

暮色を帯びた町外れの踏切と、小鳥の様に聲を揚げた三人の子供たちと、さうして、其の上に亂れ落ちる鮮な蜜柑の色と

すべては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく通り過ぎた。が、

私の心の上には、せつない程はつきりと、この光景が焼きつけられた。さうして、そこから或えたいの知れない朗な心持が湧上つてくるのを意識した。私は、昂然カウゼと頭を擧げて、まるで別人を見るやうに小娘を注視した。小娘は、何時かもう私の

前の席に歸つて、相變らず輝だらけの頬を萌黄色の毛絲の襟

卷に埋めながら、大きな風呂敷包を抱へた手に、しつかりと三

等切符を握つてゐた。

(芥川龍之介全集第二卷)

イニキ
カウゼ
キユウ
ウメ

昂然と

えたいの知れない

芥川龍之介全集

芥川龍之介著、十

卷、全著作を収む、

第二卷は小説集、

昭和九年(一九三四年)

月—昭和十年三

月—八月刊行。

佐々醒雪

名は政一、京都市の人、國文學者、文學博士、東京高等師範學校教授、大正六年(一九一七年)歿、年四十六。

竹取物語

作者未詳、かぐや姫を主人公とする平安朝初期の物語、物語の最初のもの。

伊勢物語

著者未詳、在原業平の事蹟を骨子とした歌物語

一 言葉の變遷

佐々醒雪

不思議なものは言葉の變遷である。日本語は幸にして二

千年近い記録を有してゐて、世界で頗る古い言語の一つであ

る。しかも、萬世一系の帝室を戴いた同一民族の間にのみ發

達したので、今から約一千年前に出來たといはれる「竹取物語」

や「伊勢物語」を見ても、半分以上は、今日も平生使用してゐる言

語で出來てゐる。こんな國は、いふまでもなく、世界中にまた

とはないのである。一千年前即ち十世紀前といへば、今の歐

洲諸國などは、皆まつたくの野蠻國であつた。

日本語は、こんなに久しい時代を経てゐるから、同じ語でも、

その意味は甚だしく變化したものが多し。例へば、「いへ」とい

いへあるじ。

ふ語などはその一例であらう。昔は「いへ」といふと、家族とか家庭とかいふことで、随つて「いへあるじ」といへば、一家族中の主長、即ち戸主のことであつた。然るに、今日「いへ」といふと、家屋、即ち建築物のこととして、「いへぬし」は貸家の持主の義に用ひられてゐる。

更に甚だしい變化は、形容に用ひる詞などに多い。例へば、平安朝の人が「あはれなる人」といふと、大抵は美人のことである。我々が貧民や薄倅者を「あはれなる人」といふのとは雲泥の違ではないか。

かういふ變遷は、そんなに古い時代ばかりではない。漢語がしきりに用ひられはじめから、同様の變化は認められる。例へば「不用」といふ語は、今日では「入用でない」といふこと

平安朝

桓武天皇が平安京に奠都し給うた時から源頼朝が鎌倉に幕府を創立するまで約四百年間。
(五十四—八五三)

薄倅者

雲泥の違ひ

非常にあつたりのあること

中古

武家時代

鎌倉時代から徳川時代の末に至るまで政權が武家に歸して居た時代。

爲朝

源爲義の第八子、武將、鎮西八郎といふ、嘉應二年(二二〇)歿、年三十二。

爲義

源義朝等の父、武將、保元元年(二八二)歿、年六十一。

無法者

鎌倉時代

武家政治の始から北條氏滅亡まで約百五十年間。

であるから、紙屑買が「御不用物はございませんか」と呼んで來る。然るに中古では「不用なるもの」といふと、用ひるに堪へぬといふまかあはらのこととして、更に降つて武家時代に入ると「爲朝が不用であつたから、父爲義が九州に追つた。」などと記してあつて、不用といふのは「いたづら者」または「無法者の義」である。鎌倉時代に「不用なもの」は「ございませんか」と呼び歩いたなら、「いたづら者はゐないかね」と呼ぶく鼠取藥の行商人と間違へられたであらう。

これ等はまだ單なる變遷で、中には、その變遷の間に、語源の意義に對して奇怪な矛盾を生じたものもある。漢方醫が廢れて、藥を煎じることがなくなつても、藥罐といふ名は残つてゐたり、その他不思議な言葉を列挙すれば際限もないが、就中、

抹茶

あまのちや

希代なのは「茶碗」や「さかな」である。

日本でまだ立派な陶磁器の出来ぬ頃、支那から渡つて来た上等の陶磁器は、専ら抹茶の席ばかりに用ひたから、これを茶碗といつたのである。然るに、日本で硬い上等のものが澤山出来るやうになると、御飯を食べるにも、番茶を飲むにも、陶磁器を用ひはじめた。そこで、飯食茶碗とか、茶飲茶碗とかいふ不思議な語が出来た。今日ではコーヒー茶碗とさへいつてゐる。御飯を食べるのやコーヒーを飲むのは、御飯碗、コーヒー碗ともいひさうなものだが、さう理窟通りにゆかないのが言葉である。

「さかな」とは、本来酒を飲むときに食べるものといふ語である。「さか」は「酒樽」「酒盃」の「さか」である。「な」は何でも副食物に

上戸
あつり、あつり、あつり
人数の多い家
立派な家
下戸に對して
酒をよく飲む

するもののごとで、古は、野菜類は勿論皆「な」であるし、昆布や若布などのやうな食べられる海藻は、皆「磯菜」といつた。それから、魚類は「な」の中の上等のものであるから、上等の建築用材を「ま木」といひ、屋根を葺く上等の草を「ま草」といふやうに、これを「まな」と稱へた。今の「まな板」「まな箸」などいふ語は、これから來てゐる。然るに、酒といふものは上戸即ち上等の家でなくては飲用しないし、且酒を飲むときは、今も昔も贅澤な副食物を求めることが普通であるので、自然、魚類は、酒席に多く供せられて、「さかな」といふ異名を得るやうになつた。既に魚類が「さかな」といふことにきまつてしまふと、下戸が食べてもやはりこれを「酒な」といふのは、飯を食べてもやはり茶碗といふのと同じ不思議である。

統領
たづさはる

棟梁
印半纏

江戸歌舞伎
江戸時代江戸で行
はれた劇
人爲的
自然になつたの
人か手を知つた

言葉はまた使つてゐる中にだん／＼下落するものである。例へば「大工」といふ語は、工即ち工藝家中の俊秀なものの尊稱で、多くの小工どもの統領を呼ぶ名であつた。然るに、今日では建築事業にたづさはるものは、小屋掛のたゞき大工でもやはり大工である。かの棟梁親方なども同様で、今日は一人の手下もなく子分もない男でも、印半纏さへ著てをれば、即ち親方であり、棟梁である。

最後に一つ、故意に轉訛せしめた例を示さう。言語の變遷は大抵自然のものであるが、江戸歌舞伎などには、故意につくつた人爲的の言葉がある。一時、兵隊言葉といつて、丸木橋を獨木橋といつたり、一軒家を獨立家屋といつたりしたこともあつたが、今ではそれも廢止せられたやうだ。

齋宮
昔天皇の御
身位に伊
勢大神宮に
奉仕せられた
未僧の早サ
スは五サ
至當
醒雪遺稿

大町桂月編、佐々
政一の遺文を
集む、大正七年
二月刊行。

その他には、迷信から來た變造語もいろ／＼ある。例へば、海邊に生えてゐる蘆といふ草を「悪し」と聞えるのを忌んで、わざと「よし」と呼びかへたり、四を「死」と通ずるとして「よし」といつたり、梨を「ありの實」、硯箱を「あたり箱」、鯛を「あたりめ」といふ類が行はれてゐる。古も、伊勢の大神宮に御奉仕になる齋宮の御所では、髪のない僧侶をわざと「髮長」といつた例もある。要するに、言語の不思議な現象は、同一の語が、例へば髮長といつて髪のないことを表すやうに、正反對の意味にさへ用ひられるのであるから、その變化は、蓋し窮極を知るべからずといふのが至當であらう。

醒雪遺稿

高濱虚子

名は清、松山市の
人、俳人、小説家、
明治七年(三五三)
生。

一二 俳句に就いて

高濱 虚子

俳句は十七字の詩であるといふことは解りきつたこと
やうであるが、私は、こゝに改めて、「俳句は十七字の詩である」と
いふ事を、第一にはつきり言つて置く。

和歌は千數百年の歴史をもつ短い詩である。この和歌か
ら連歌が起り、連歌から俳諧となり、俳諧から俳句が生まれて
來た。この變遷は少くとも百年二百年の年月を経て成つた
ものであるが、畢竟、俳句は和歌の上の句が獨立して出來たも
のである。随つて、和歌では五七五七七の調であるが、俳句は
五七五の調である。

この和歌の五七五七七といふ調子は、或感じを縷々として

連歌
俳諧

鳥屋

縷々として

あまの原

古今集にある安倍
仲麻呂の歌。
安倍仲麻呂―中務
大輔船守の子、靈
龜二年(三七〇)遣唐
留學生、在唐五十
餘年、寶龜元年二
四三〇)歿、年七十。

故山
綿々として

古池や

芭蕉の句。
芭蕉

本名松尾宗房、伊
賀國三重縣)の人、
元祿七年(三五四)歿、
年五十一。
ぼく／＼とした

述べるに適してゐる。たとへば、

あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし

月かも

といふ歌の如きは、たゞ月に對し、海原遠く離れた故山を偲ぶ
ものであるが、かく三十一字になつて見ると、如何にも遣るせ
ない情緒が綿々として出てゐるやうな感じがする。これは
五七五七七の調子が、自然に縷々としてその感じを述べるに
適してゐるからである。ところが、俳句になると、

古池や蛙飛びこむ水の音

といふやうに、和歌では下の句として缺くことの出來ない七
七の文字が省かれて、單に五七五といふ調子であるから、大い
に面目を改めて、ぼく／＼とした調子になつて來る。上に述べ

たやうに、俳句も和歌の上の句だけを取つたものであるから、やはり和歌のやうな調子のものでありさうに思へるが、實際は大變違つて、全く別種のものとなつてゐる。この五七五といふ調子は、どんな調子のものであるかといふと、五七五の三つが一寸離れ／＼になつてゐるやうな感じがある。和歌の方は、七七といふ文字がその後にあるがために、全體の調子が伸びやかになつて、渾然として一つに溶合つてゐるのであるが、その七七の文字が無くなつて、單に五七五だけになると、その五と七と五とが各獨立して、別々のものとなつて行かうとする傾向がある。これが和歌と俳句との大變な相違となるのである。

即ち、この古池の句にしても、先づ「古池や」といふ五字で、讀者

渾然として

換言する

に古池の景色を想像させ、次に「蛙飛びこむ水の音」といふ十二字で、蛙の飛込む水音がするぞと、第二段の想像をさせるといふ順序になつて来る。換言すれば、古池の句の場合は、初の五字だけが獨立してゐて、あとの七と五とは連なつてゐるのである。

奈良七重

芭蕉の句。

奈良七重七堂伽藍八重櫻

といふやうな句になると、五と七と五と皆離れ／＼になつてゐる。この句意は後に述べよう。

テニヲハ

和歌は「テニヲハ」の文學といつてもよい程に「テニヲハ」をや

かましくいふが、これもやはり綿々として盡きぬ情を歌ふに適した文學だからである。然るに、俳句では「テニヲハ」は勿論、説明的な言葉は出来るだけ省略し、「や」とか「かな」とかいふ特別

の助辭を使用する。随つて「テニヲハ」には重きを置かない。この俳句の調子から來る特色が、情を述べるのにはどうも不適當なのである。この情を述べるに幾分でも不適當な文學である俳句の使命は、然らば何であるかと言へば、それは景色を描くといふ點にある。恰も繪畫のやうに、景色を言葉で、文字で、描くのである。

元來、文學は言葉で出來てゐるもので、言葉は時間的のものであるから、感じを順々に歌つて行くとか、又は、事件を順々に述べて行くとかいふのには適してゐる。長い小説のやうなものでも、短い和歌のやうなものでも、或事件の推移を寫すとか、或感じを述べるとかいふ性質のものである。それが畫である、目に見る或瞬間の景色を畫面に描き現すものであつ

て、時間的でなくて、全く空間的のものである。然るに、俳句は意外にも、——私は「意外にも」といふ——繪畫に近いものとして存在してゐる。

併しながら、景色を描くといつても、文學であるから繪畫とは全然同一にはならないが、大體に於て、文學本來の性質たる時間的變化を描くに適しないで、空間的描寫に適してゐると言へようと思ふ。これは五七五といふ調子と、切詰めた短い詩形とから起つた當然な結果で、これがやがて一方に大なる特色を形造つてゐるのである。尤も、かういへばとて、俳句も文學である以上、勿論、感じとか事件とかを述べてはならぬと言ふのではなく、又、古來さうした俳句は全く無いなどといふのではない。

空間的描寫

季題

又、俳句には「季題」といつて、春夏秋冬の季を述べなければならぬ事になつてゐるが、これは景色を描く上には當然の要求である。何故なれば、四季を超越した景色といふものは、全然この世界には存在しないからである。

次に、實際の句に就いて説明を二三試みよう。これは極端な例であるが、

女郎花腰黒茶碗髻奴

といふのがある。これはどんな意味かといふと、女郎花が咲いてゐる、その側で髻奴の生えた奴が腰黒茶碗で飯を食つてゐるといふのである。これは前にも述べた様に、五七五の調子から自然に離れ〜になつてゐるのである。即ち、女郎花腰黒茶碗・髻奴と別々に離して述べてあるので、唯我々が心の中

奴

で、その離れ〜になつてゐる物に連絡をつけて、女郎花が咲いてゐる側で、髻奴が腰黒茶碗で飯を食つてゐる様子を思ひ浮かべるのである。これは繪畫にすれば女郎花と腰黒茶碗と髻奴との三つの別々な物が、一畫面に描き現されてゐる譯になる。同じ様な極端な例であるが、前に挙げた芭蕉の句、

奈良七重七堂伽藍八重櫻

といふのは、奈良は古の都であつて、奈良七重は、人家が澤山立ち並んで賑かであつたといふことをいひ、「七堂伽藍」は、立派なお寺の大きなのがあり、そして、「八重櫻」は、奈良は八重櫻の名所であるから、櫻の盛りの奈良といふ事を現した句である。この句は、どうかといふと、一寸とりとめのつかないやうな句らしく考へられるが、我々は勝手に想像して、一幅の古の奈良の

畫を描き出すのである。これらの句は共に極端な例であるが、次は、

名月や舟なき磯の岩づたひ

といふ句に就いて考へて見よう。こゝに「名月や」といふのは、空に名月がかゝりやき渡つてゐるといふので、「舟なき磯」は、舟が一艘も見えない磯といふのであり、「岩づたひ」はその磯の岩の上を傳うて人が歩いて行くと、いふのである。これにも言葉が大變に省略されてゐる。私は前に和歌は「テニヲハ」の文學であると言つたが、俳句では「テニヲハ」のみならず、その他の色々な言葉も省略される。髻奴の句も、たゞ名詞をつゞけたばかりであり、奈良の句も名詞ばかりである。岩づたひの句はどうかといふと、何も別にいつてはゐないが、美しい名月に誘

名月や
炭太祇の句
太祇は不夜庵と號する、江戸の人、
俳人、明和八年(西
三三)歿、年六十三。

蕪村

谷口信章、與謝姓も名乗つた、攝津國(大阪府)の人、
俳人、畫家、天明三年(西四三)歿、年六十八。

はれて、岩づたひに人が歩いて行く、普通ならば、舟が一艘もなく寂しい青白い磯邊を、よい心持で歩いて行く、といふことが想像される。して見ると、この句に於ても「テニヲハ」のみならず、如何にも多くの言葉が略され、簡略になつてゐるのが解る。このやうに、景色を描くといふ點に於ては、繪畫と同じやうであるが、俳句の方には、岩づたひに歩いて行くといふやうな時間的なことも吟じ得るが、畫の方にはそれが全く出來ない。

蕪村の句に、

水鳥や舟に菜を洗ふ女あり

といふのがある。京都の賀茂川などには、よく菜を洗つてゐる女を見受けるが、場所は何處とも限らない。舟で女が菜を

洗つてゐる。菜を洗つてゐる女に特別に何の關係があるといふのでもなしに、水鳥が浮いてゐるといふ景色で、全く繪畫と同じ描き方である。舟に菜を洗ふ女と水鳥とで、近景と遠景とを描いてゐるのである。

かういふ風に、俳句は、和歌の上の句から獨立した十七字から成つたものであるが、十七字の詩として獨立する必要上、和歌の範圍を脱して、別に景色を描くといふ一つの大きな特色を成したのである。しかも、これは偶然に成つたのではなく、五七五といふ調子から來た當然の結果である。

(講演筆記)

笹川臨風

名は種郎、東京市の人、歴史家、文學博士、明治三年(三五〇)生。

武田鶯塘

名は四郎、東京市の人、俳人、明治七年(三五三)生。

巖谷小波

名は季雄、東京市の人、俳人、お伽話作家、昭和九年(三五四)歿、年六十四。

高田蝶衣

名は千郷、兵庫縣の人、俳人、明治十九年(三五五)生。

永田青嵐

一頁参照。

原石鼎

名は鼎、島根縣の人、俳人、明治十九年(三五五)生。

一三 現代俳句抄

初霞雞犬の聲遠近に

笹川臨風

夕空のうつろひて羽子頻りなり

武田鶯塘

大和路や雲雀落込む塔の陰

巖谷小波

綿ほこりつけて蛇去ぬ窓うらゝ

高田蝶衣

田植川草を浸して流れけり

永田青嵐

山の色釣上げし鮎に動かかな

原石鼎

白田亞浪 名は卯一郎、長野縣の人、俳人、明治十二年(三五五)生

山口誓子 名は新比古、京都市の人、會社員、俳人、明治三十四年(三五二)生

伊藤松宇 名は半次郎、長野縣の人、俳人、安政六年(三五七)生

水原秋櫻子 名は豊、東京市の人、醫學博士、俳人、明治二十五年(三五三)生

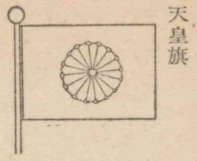
飯田蛇笏 名は武治、山梨縣の人、俳人、明治十八年(三五〇)生

長谷川零餘子 名は諧三、群馬縣の人、俳人、昭和三年(二六六)歿、年四十三

大谷繞石 名は正信、松江市の人、俳人、昭和八年(三五三)歿、年五十九

ひとへもの徑の麥に刺されけり
 匙なめて童たのしも夏氷
 草市の一夜露けき都かな
 鮫釣る子障子洗ふは姉ならめ
 山柿や五六顆重き枝のさき
 冬山のいたゞきにすこし日當れる
 宵火事の消えて雲となりにけり

白田亞浪
 山口誓子
 伊藤松宇
 水原秋櫻子
 飯田蛇笏
 長谷川零餘子
 大谷繞石



天皇旗

矢田挿雲 名は義勝、横濱市の人、小説家、俳人、明治十五年(三五四)生

長谷川かな女 東京市の人、故零餘子の夫人、俳人、明治二十年(三五七)生

杉田久女 鹿兒島市の人、俳人、明治二十三年(三五〇)生

久保より江 松山市の人、醫學博士久保猪吉の夫人、俳人、明治十七年(三五四)生

本田あふひ 東京市の人、男爵本田親齊の夫人、俳人、明治八年(三五三)生

御出門に雪大晴や天皇旗
 傘さゝぬまだ人通り春の雨
 あたゝかや水輪ひまなき廂うら
 土手につく花見疲れのかた手かな
 のうれんに淡雪ふりて消えにけり

矢田挿雲
 長谷川かな女
 杉田久女
 久保より江
 本田あふひ

河井醉茗
名は又平、堺市の
人、詩人、明治七
年(三五)生。

一四 冬 青 樹

河井 醉茗

葉もあたりまへ、
枝振もあたりまへ、
知らない間に
小さい白い花が咲いたやうだが、
いつのまにか小さい青い實になつて、
青い實が黒くなると
小鳥が氣づいて食べに来る。

醉茗詩集

河井醉茗著、既刊
詩集に新作を加へ
たもの、大正十二
年(二五八三)一月刊行

よけいに茂りもしないが
よけいに落葉もしない。
冬が来ても
どの葉もこの葉も
同じやうに呼吸をして、
同じやうにあをあをと
静かに
目にたたない冬青樹よ。

しむいぢぢのき...
はくくらの木の...
たもつて...
地味な...
(醉茗詩集)

戸川秋骨

名は明三、英文學者、慶應義塾大學豫科教授、昭和十四年（三五）卒、年七十。

子息を致す所、
生後、五五冬の日記

五五冬の日記

戸川秋骨

戸川秋骨

一月一日

冬の畠は全く無事である。只、秋に種を播いた豌豆と蠶豆との芽が霜にも負けず、雪に蔽はれては却つて生長して行くばかりである。春の用意は冬、寒中に於てすべきだ。僅かばかりの畠地ではあるが、今何も作つてない、あいた所にまぢ肥料を置く。肥料は自給である。

樹木にもそれが必要だといふ。所謂寒肥を施さなくてはならない。鋤を取つて一本の樹のまはりを掘ると、寒さのためには凍つて居て、掘れはするが、土の一塊々々は殆ど石のやうに固い。小さい庭の樹木の半分ほどに肥料を施したら

まぢ肥料
自給
寒肥

もうくたびれてしまつた。短い冬の日ももう暮れて來たので今日はこれでやめる。

一月一日

夕食が終つて、一家がまだ食膳のまはりを去らない時に、よく私は昔の話や、自分の話をするのが癖になつた。子供達が食物に就いてかれこれ文句を言ふのを、多少誠める心持もあつて、自分の幼時なども言出す。おかあさん——お前方のあの死んだお祖母さんが、よくこのおとうさんに言つて聞かせた事だが、おとうさんの子供の時分は非常に貧乏で——おとうさんの又おとうさんはうちを留守にして何處かへ行つて居たのだ——日々の食事さへろくに出來なかつた。或時などはもうお米を買ふ事も出來ず、御飯がたべられないのでお

とうさんとおとうさんの弟とが、おなかがすいた、すいた、とかましく言ふので、ほんとに困つてしまつた事さへある。私はそんな話までした事もあるが、子供達にはそんな事もお伽話のやうにしか思はれないらしい。いや、成長する力に充ちた子供達が、親のやうな気分になつたら、それこそ困つた事だ。こんな悲惨な事はお伽話として聞いてくれる方がよい。そんな話を聞かされた子供の一人は言出した。おとうさんの話はいつでも昔の貧乏であつた事だが、お祖母さん——母方の、現在達者で居る老人——の話は、いつでも昔の自分の榮華だ、と言つて笑つた。なるほど、さう言はれて見ると、このおばあさんは昔の繁昌ばかりを口にする。さうだ、貧乏にせよ、榮華にせよ、昔の事を口にするのは、つまり愚痴だ、これはやめた

エマスン
ラルフ・ウォル
ドワ・エマスン、
アメリカの思想家
(西暦一八〇三—一八六三)
ブルウタス
マルクス・ニュウ
ス・ブルウトウス、
古代ローマの政治
家(西暦前六三—四三)
フィリピの戦
フィリピンはマケド
ニヤ(ギリシヤ)の
一都府、ブルウタ
ス及びカウシウス
の軍が、オクタヴ
イヤス及びアント
ニウスの爲に敗れ
たところ。(西暦前
四三)
ユウリピデイス
古代ギリシヤの悲
劇詩人、思想家(西
暦前四八四—四〇七)。

方が良いかも知れない。子供の訓誡などにはあまりなり得まいから。併し、愚痴ではあるがまた兩方とも一種の自慢でもある。若しさうとすれば、貧乏であつた自慢の方が、今日としては話し榮えのある自慢だぜ、と言つて私も笑つた。

一月——日

久し振りでエマスンの勇壯論を讀んだ。

「ブルウタスに就いて斯ういふ話がある。ブルウタスがフィリピの戦後、自刃しようとした時、ユウリピデイスの句を引いて『あゝ、徳操よ、吾は終生汝に従へり。而も、今にして結局汝の影に過ぎざるを見る。』と言つたさうである。私は勇士ブルウタスがこの話に依つて侮辱されたものである事を疑はない。勇壯なる心の人は、その心の正義とその貴さを賣りも

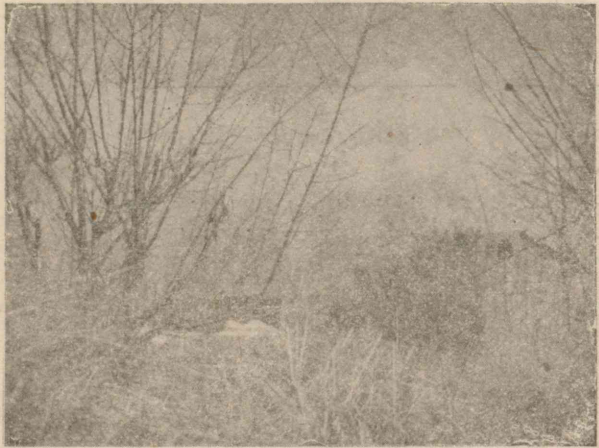
飽食暖衣

のにする事はない。勇壯の人は、美味を喰ひ暖く眠る事を願ふものではない。偉大なる事の要素は、徳そのものを以て足る事を覺えるにある。貧困はその裝飾である。それは飽食暖衣を要せず、損失にも甚だよく安んじ得るのである。とエマソンは言つて居る。徳を守つたが爲に、却つて身の不幸を招いたのは當然である。さうあるべき筈である。それをブルウタスとも言はれる人が、最後の自分の没落を見て、それまで守つて居た徳が影に過ぎないなどと呪咀の言を吐いたのを、エマソンは怪しんで、それは作り話であると斷言して居るのである。徳を罵るのも悲壯で、ブルウタスに對する一片の同情でもあらうが、エマソンのやうに考へるのが眞實であらう。世の中は善人亡び悪人榮える、と考へるのもあまりであらう。

呪咀

正鵠を得る

が榮枯盛衰と徳とは何のか、はりもないとするのが、正鵠を得た考へ方ではあるまいか。



冬の姿

二月一日

冬の美は霜にある。靜かな晴切つた朝でなければ霜を見る事は出来ないが、さういふ朝はどんなに寒くても、身體が引締つて心持がよい。霜の美は老境の美である。自然は死んだやうに見えるが、それが霜に蔽はれて居る光景は、その霜に恐るべき生物を枯死させる力のあるに拘らず、却つてそれに

髣髴する

穎割

小味な

依つて生かされて居るやうに見える。地上は一面にその白い薄物を以て敷きつめられて居る。枯草も一本々々その薄物によつて包まれて居る。殊に枯残つて居る雑草の細かい細かい而も密集して居る繊維が、丹念に細かく、一筋々々、一部一部それに依つて包まれて居るのは、自然の中に比べるもののないほどの美観である。細かいレース、佳人の著た薄物は僅かにそれに比べられるものであらうけれども、人工は如何なる繊細な技を以てしても、この姿を髣髴させることは出来ない。一年を通じて自然界に見る珍しい光景は、春に見る若い草花の穎割と、この枯草の霜を被つた姿とである。私は冬の自然は、その光景は、大きなものと思つて居た。その極致は崇高にあると考へて居た。今にしてこの微細な處にも、小味

豊潤
蕭條
凋落する

自然・氣まぐれ・
紀行

戸川秋骨著 隨筆
集、昭和六年（三五）
二五月刊行。

な美しさのあるのをうれしく思つた。この霜を踏んで木立のほつりを歩いて居ると、忽ち傍らのかれた叢の間から名も知らない小禽がさつと飛立つ。あとにはその小枝から蹴散らされた霜が粉のやうに落ちて來る。

さう、自然のあらはれ方はいろ／＼である。春の華麗、夏の豊潤、秋の蕭條、それ等に比べると、冬は矢張り、むしろ崇高の趣を主とするのであらう。木の葉がみな凋落して居るから、どこまでもが見透しになる。光景は廣く大きくなる。廣野や高山の姿は冬になるとまた特殊の趣がある。

（自然・氣まぐれ・紀行）

貝原益軒

名は篤信、筑前國
（福岡縣）の人、儒
者、正徳四年（一七三
七）歿、年八十五。

ことわり
たがふ（ちがふ）

一六過と悪

貝原益軒

「衆人の行、萬事につきて過と悪とあり。過とは、心に悪なけれども知らずして理にたがひ、或は心附かずして理にたがふをいふ。悪とは、善悪は知りながら、慾に引かれて理にたがふをいふ。これ自ら欺くなり。身を修むるには、過悪を改め善に遷るを務とすべし。聖人は過なし。賢者以下は過なき事なし。殊に凡人は過多し。何ぞ今の世に過なき人あらんや。人の諫を聞きても用ひず、我に過あれども知らずして、過なしと思ふ人あり。これ自ら修むるに志なきゆゑなり。若し自ら修むる人は、過多き事を知るべし。自ら省みて我が過を知り、人の諫を聞きて我が過を改め、善に遷るべし。」

尙書

書經ともいふ、支那最古の經典。

過ツテハ則チ論語學而篇。

偏一偏一過



貝原益軒

「常に我が身を省みて、先づ我が過を知るべし。既に過を知りなば、速に改むべし。尙書に「過ヲ改ムルニ吝ナラズ」と言へり。吝とは惜しむなり。過を惜しまずして早く改むるをいふ。孔子も「過ツテハ則チ改ムルニ憚ルコト勿レ」とのたまへり。我が身の過を知らざるは愚なり。過を知りて改めざるは即ち悪なり。知らずして過つより尙その罪重し。」
過は必ず氣質の偏より起る。剛なる人は心強き所より過起り、柔なる人は心弱き所より過起る。氣質の偏なる所に克ちて、過なからん事を求むべし。學者常に我が氣質の偏を察し、その過

うべなり

離婁

昔支那で、一本の毛を百歩はなれて視たといふ視力のすぐれた人。

子路

姓は仲、名は由、子路はその字、孔子の弟子。

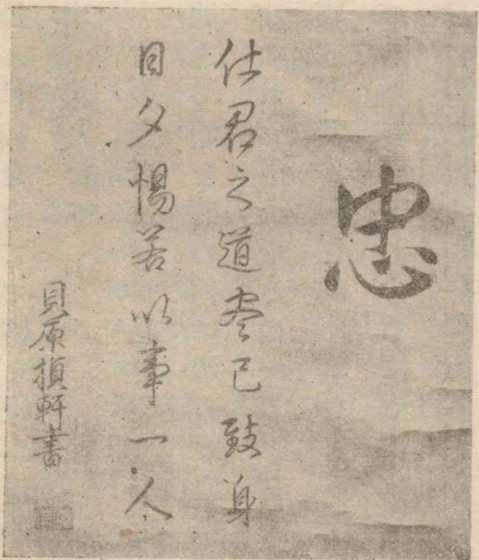
を省みて改むべし。かくの如くせざれば、學問の益なし。これ學者の専ら務め行ふべき所なり。過を改むるは、氣質の偏に克つ道なり。氣質の偏なる所には克ち難し。常に力めて十分の力を用ふべし。

我が身聖人にあらず、過多きはうべなりとて、過を知りながら改めざる人は、むげに道に志なき人なり。自暴自棄と言ふべし。斯様の志なき人にならひて、我が過を宥すべからず。人の目は、百里の遠きを見れども、その背を見ず。明鏡と雖もその裏を照らさず。離婁が明目なるも、そのまつげを見る事なし。こゝを以て、人知ありと雖も、我が身のあやまりを知り難し。故に君子の學は、専ら我が身を省み、人の諫を聞用ひ、過を知りて改むるを旨とす。子路は我が過を人の告ぐるを

程子

百世の師
程顥、宋時代の學者（西曆一〇三二—一一〇八）

君ニ仕フルノ道ハ、己ヲ盡クシ身ヲ致シ、日夕惕若シテ以テ一人ニ事フルナリ。
貝原損軒書
益軒は初め損軒と號した。



貝原損軒書

喜べり。故に「百世の師なり」と程子もいへり。人を知る事誠に難しといへど、我が身の悪しきを知るは、また人を知るよりもなほ難し。こゝをもて、我が過を告知らする人あらば、誠に喜ぶべし。人僅かなる財を贈り、或は酒肴を贈るも、受くる人これを喜ぶ。況や、いひ難き諫をいひ、自ら知難き過を聞くをや。我諫を聞く事、豈幸ならずや。過を聞く事を嫌ひ、諫をふせ

ぐは、悪しきの至なり。諫を聞きて過を改むるは、醫を招きて病をいやすが如し。過あれども諫をふせぎて、人の正す事を嫌ふは、病を育てて醫を嫌ふが如し。その身を失へども顧みず。悲しむべし。

古の賢者は、我が過を聞く事を好み、人の諫を喜べり。諫を聞きて過を改め善に遷らば、道に進む事極まりなし。善なる事これより大なるはなし。又、古の賢者は、人に譽めらるゝを喜ばず、我が善を聞く事を好まず。我が善を聞きては益なきのみならず、若し少しにても我が身に誇る心出でてきて、善をなすに怠らば、大なる害あり。今の人は、我が過を聞く事を好まず、人の我を譽むるを悦び、我が善を聞く事を好む。世にへつらへる小人多き故、譽むる者多し。それを誠ぞと心得て身に

へつらふ
小人

かたくななる

老耄す

すたる

有難し

大和俗訓

八卷、具原益軒十訓中の一、教訓書、寶永五年(三三六)作。

ほこり、善を行ふに怠るは愚なり。末の世の人は、唐も大和もすべて人の諫を好まず。故に、人を諫むるをひとへに世なれぬかたくななる人と思へり。父として子を諫むれば、我が父は老耄せりといひ、また、老人は今の風を知らずとて、毀り怨む。臣として君を諫むれば、おごれり、無禮なりとて怒り遠ざく。こゝをもて人毎に世の俗になれ、人の欲にしたがひ、へつらひて諫めず。この風若し世に行はれ、風俗となりなば、善は日々にすたり、悪は日々にさかんになりて、道行はるべからず。悲しむべし。およそ、諫を言ふ人有難し。古來唐も大和も諫を喜ぶ人は最も有難し。故に諫むる人も稀なり。

(大和俗訓)

關ヶ原の合戦

慶長五年(一三〇)石田三成が豊臣秀吉死後の政變を憂へ徳川家康と雌雄を決した合戦、相馬は石田方に加つ

世帯一定

本領安堵

十三卷、新井白石が甲府侯綱豊(後の將軍家宣)の命をうけ、元祿十四年(三三三)著した諸侯の傳記・沿革・勳功を誌した書。翌十五年上進。

斯くて關ヶ原の合戦事終り、天下悉く平ぎて、相馬既に世帯を没收せられ、家亡ぶべきに極まる。政宗徳川殿に訴へ申しけるは、「相馬はたゞにも政宗が年頃の敵なり。それに上杉石田等に與したるが一定に候はんには、政宗彼が爲に討たるべき時至つて候ひしに、君の仰承り馳せ下る由を聞きて、忽ちに舊き恨を忘れ、新しき恩を施して候ひき。是偏に彼が野心を挾まざりし故にあらずや。且は又累代弓矢の家、此の時に至つて長く斷絶すべきこと、誠に不便の至なり。唯然るべくは、彼が本領安堵の事、御免を蒙らばや」と、折に觸れて度々歎き奉りしかば、其の事となく、年月を経て後本領をぞ賜うたりける。

(藩翰譜)

一八 ボタンの穴

荻原井泉水

こんな事がよくある。シャツの着心地が何となく窮屈なと思ひつゝ、一日を過して、著かへる時に見ると、ボタンの穴を一つ掛けちがへてゐたのだ。最初の一つをふつと掛けちがへたことが、其の次も、其の次も、ずら〜と皆掛けちがへる事になつたのだ。これがシャツであるからこそ、一日少しく窮屈をした位で済む。それと同じやうな事を、私達はもつと重大な生活の上の事として居りはしないか。其の事の第一著手において、一桁まちがへた爲に、最後までまちがへる事になる。かうした人は、ボタンを掛けちがへた人のやうな、眞面目

第一著手

荻原井泉水

名は藤吉、東京市の人、俳人、隨筆家、明治十七年二月四日生。

コッケー
キハ
キツ
トシヨウ
シヨケレ 所見
イイホヤ
ツカレ
ヨク
クツ
ハカス
ハズ
ニヤウ
シヨケレニホイニ
クイケレ
ハラケレ

な滑稽をし通してゐたといふことを、一生を終へる際になつて初めて氣附くのである。

是は途上の所見である。父親が子供を歩かせてゐる。よちよちと歩く、其の様が今日は少し歩き下手だとは思ひつゝ、手を引いて行く。ちと疲れたやうだ、いつもより疲が早いと思ひつゝ、好く氣附いて見ると、靴の右と左とを取りちがへて穿かしてゐたのだつた。靴の右と左と、好く見ればまちがへる筈もないものを、うっかりとまちがへてゐたのだ。子供こそかはいさうである。だが、それと同じやうな事を私達は日常の身邊に於てしばしば経験する。何か腹立たしく思ふやうな事のあつた時には、又は、これはこんな筈ではないがと思ふやうな時には、自分が其の事の右と左とをまちがへて居り

カハリミル
ケフのキョフ
カヒ
ユキダス
ダメ
フサキ
トモ
トリヤガ
コレ
ヘイセイ
タイテイ
ヒトリ
ミ
東海道膝栗毛
十返舎一九著
戸八丁堀の彌次郎
兵衛・北八が東海
道を上り、伊勢參
拜をすませて京に
入るまでの滑稽道
中記、享和二年三
月三十一文化六年三
月三十一日刊行

はしないかといふことを省るがよろしいのである。

いつぞやこんな事があつた。興のままに岸にあるボートに乗つた。二三人がいきなり、權を取つて漕ぎ出した。ボートは動くけれども、進みが悪い。權をとるものはばか力を出す。駄目だ、駄目だ、何の事だ。あべこべだ。舳と艦とを取違へて漕いでゐたのだつた。是と同じやうな事も、私達は平生の仕事において時々する。それは大抵、獨り苦笑しただけで済む事が多いが、それが笑ひ事にとゞまらない、重大なことになることもあるのだ。何事にても前と後といふものがある、其の點を先づ見究めてから取りかゝるべきものである。

東海道膝栗毛にかういふ話がある。ある宿で、彌次郎兵衛は五右衛門風呂に浮いてゐる蓋を取つてはいつた。あ、熱い。

カス
ソコ
シッパイ
サウムレ
キエウイ
カレシ
アキマル
ヤクド

燒處

ツモリ
ナレエ
シクヨ
ハシ
ウラ
ム
モシ
シヨム
シヨウ
イヤシ
モウヒ
ソッ
ウソ
オモ
カンエ

足がぢかに釜を踏んだのだ。風呂の蓋と思つたのは、實は風呂の底だつたのである。風呂の底をはがして入つたのだからたまらない。だが、是は一彌次郎兵衛の失敗として笑ひ去るべき事ではない。蓋に最もよく似てゐる形をしたものは底だ。しかも蓋と最も相反する用をなすものは底だ。すべて、第一著手としてなすべき事には注意が肝腎。物事の蓋と底とを誤れば大燒處くらゐはしかねないのである。

二

これは新聞で讀んだ話である。東京地下鐵道株式會社の社員採用試験に百六十餘名が集つた。試験問題は、次の字を行書にて書け——東京地下鐵道株式會社。受験者の悉くが忽ちに答案を出して場を出た事は勿論、誰もが皆合格した積

英語、「精神考査」と譯す、簡易な方法で、心理作用や智能の發達程度を檢査し、個人的差異を測定すること。

りてゐた。ところが合格者はたつた一人しか無かつた。誰もが行書に書く事は成し得てゐたが、悉く紙の裏に書いてゐたのだ。試験用紙はわざと半紙を裏返して配られてあつた。問題を吞んでかゝつた爲に、いきなりと、ついつかりとしてゐたのである。會社の庶務課長は語る、つまり常識以外の何物でもない。苟も毛筆で物を書く場合に紙の裏表を考へぬやうでは役に立ちません。然し、大學の卒業生の中で紙の裏表を知つてゐた者が一人しかなかつたとは、嘘のやうなほんとの話です。」と。

此の話は面白いメンタルテストである。だが、私は此の話をも少し深く考へたい。私達が物事に當る場合に、第一に肝要な事は、其の物に右と左との別、或は前と後との別、或は上と

幸田露伴

名は成行、東京市の人、文學者、文學博士、文化勳章拜受者、慶應三年(三五七)生。

間切る

底る

巧者なる

一九潮待つ間

幸田露伴

風に逆らひて舟を行るには、間切るといふ工夫もあり、流に逆らひて舟を進むるには、押切るといふ意地もあれど、唯春の日の潮の底りて遠浅の海のことく、く干潟となりたる時のみは、意地にも工夫にも舟を操らん道なく、あだに心のあせらるゝものなり。

嘗て此の事を言出でて、

「然る折にも何とか爲すべき手段ありや。」

と、老いて物事に巧者なる舟人に問ひけるに、舟人、打笑ひて、

「何時にても纜を解かんとならば、何時にても水ある處に舟を繋ぐべし。我等は、繋ぐ時に解くことを思ひて繋ぎ、解く

こゝを以て

時に繋ぐことを思ひて解く。素人は、繋ぐ時は解くことを思はず、解く時は繋ぐことを思はず。こゝを以て、歸らんとして歸る能はず、進まんとして進む能はず、徒に心を干潟にあせるやうの事もあるに至るなり。若し既に干潟に居坐りたる舟となりたらんには、我等なりとて、其の場に臨みて何の手段のあるべき。たゞ少しは早くとも、心長閑に食事など済ませて、さて、やがて立働かん折、足もつれのせぬやうに、舟の中を取りかたづけ、猶それにも時餘らば、舟道具を丁寧に検め繕ひなどして、時と潮とを待つべし。潮を待つは愚かしけれども、待たぬよりは賢きわざなり。何時か一度は爲さてかなはぬことを爲しつゝ、待たば必ず來るべき潮を待つに、大抵其の事は爲し果つるにも至らで、潮ははや

たちまちにして来るものなり。何時か一度爲さでかなはぬことは、小さき舟の中につきでもいと多きものなれば潮待つ間に爲すべきことのなきといふはなし。潮待つ間に爲すべきことあるを見出して之を爲せば、たと時の足らざるを覺ゆるのみにて、更に心あせらるゝことなどあるべくもなし。

と言ひけり。

おもしろき言葉なりと思ひしかば今に忘れず。

(露伴全集)

露伴全集
十二卷、幸田露伴の全集を集める、昭和四年(一九二九)十一月—昭和五年十一月刊行。

前田夕暮

名は洋三、神奈川縣の人、歌人、明治十六年(一八八三)生。

陰—蔭—影
ほゞける

露の臺



二〇 春

前 田 夕 暮
ゆふ ぐれ

鈍く光つた藁垣の陰に、長く伸びた露の臺がほゞけて、白い矮鶏が二三羽餌をあさつてゐる。

春の彼岸の日の色は、ぼつと薄赤みを帯びて、庭の隅の甘藷苗場は、まるで蒸風呂のやうに蒸發してゐる。

土間に立つて、明かるい外を見てゐると、日光が雨のやうにふつてゐる。その日光の中に立つてゐる木竹、雞猫犬、それ等は皆影をもたぬものはない。黒く軟い土にひいた物の影の親しさだ。

うつすらと青んだ畦と、一杯春の水を張つた水田とを向かふに見せた明かるい村の往還を、黒い風呂敷包を背負つた老

婆が一人ぼつつりと杖をついて通つて行く。と、また、あとから一人、やはり同じやうに黒い包を背に瘤のやうに丸くく、りつけて、白髪を光らして行く。

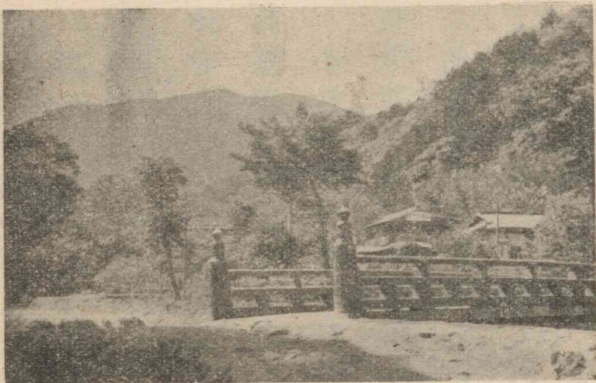
二人だけだと思つたら、そのあとから源助爺さんを先にして十人ほどの村の老人たちが、いづれも黒い包を背負つて、杖をついて、影繪のやうに次から次に續いて行く。さうして、その人たちは、低い聲ではあるが、楽しげに御詠歌を歌ひながら行く。極樂浄土禮讃の念佛を申しに山に行く人たちである。それから一時間ほど経つて、上の山の畑の畦で、私はひとりで風を揚げてゐた。

風はよくあがつた。風絲を手に握つて、高い畦に腰をかけてゐる心持はよいものだ。全く無心の境地である。

阿夫利山

大山、雨降山ともいふ、神奈川県中部に聳える、海拔一五三米。

私の風の二本の尾は、ゆらり／＼と空中で光つて波を打つ



阿 夫 利 山

てゐる。その尾の裂けてゐる下には、阿夫利の黒いとがり嶺がそそり立つてゐる。私の眼は風を離れて、その山の巖を流れる。

思ひきり谷が深くくひ入つてゐるほとりて、更に前山の圓い線がふつくらと浮かんでゐる。その山の上には、ほんの掌ほどの廣さの赤い毛氈が敷かれてある。その赤い毛氈の上には、豆粒ほどの人が黒くかたまつてゐるのが遙に見える。さうして、春の淨

土を禮讚する老人たちの念佛の鉦かねの音が、その山上から遙に
凧の糸を傳つて私に漂うて来る。

誰か向かふの往還を馬を曳いて行く。

麥畑の中を行く旅人がある。黒い帽子をかぶつてゐる。

ゆた／＼と天秤をしなはせて行く農夫がある。

子供が一人、農夫のあとを駆けて行く。

小さな赤い旗を廻りに立てた盤臺を頭に載せて、體を振り

振り行く夫婦の館屋がある。

館屋は何と思つたか、原つばの菜の花畑の真中で、でん／＼

でんと太鼓を打つて、何か唄を歌ひながら、二人で踊りだす。

二人は調子づいて、ぐる／＼と緩く體を廻しながら、ふらり

ふらりと腰をうかして踊つてゐる。

しなはせて

盤臺

テンポ

「調子の速さ」の意
イタリイ語。

落つこちた（落ち
た）

胴間聲

赭ら顔

太鼓の音が、その合間に緩いテンポで鳴る。

誰も見てゐる人としてはなない原つばの眞晝である。

私は人形踊のやうな館屋の踊を、ついうつとりと眺めてゐ

た。さうして、張りきつてゐた糸が緩くたるんで、一二町さき

の桑畑の中に凧の落ちてゐるのを知らぬほどであつた。

「おい、誰の凧だよう。俺おれの頭に落つこちたでないか」と、胴

間聲で呼ばれて、始めて氣がついた。あわてて立ちあがつて

見ると、平たい大きな赭ら顔が菜の花の上で笑つてゐる。

「坊やの凧か。ほ／＼、いいか、糸をたぐるのだよ。」と高く兩手

で上にあげてくれた。

私は糸を片手で高くさし上げて、畦路を一散に駆けだす。

低くたるんでゐた糸が、つと張つて、斜に高くあがつて行つた

のす

ので、私は始めてほつと安心をして體を轉換させる。
 凧は喜ばしげに、うつすらと青んだ草山を這ひあがつて、村
 の老人たちが山上禮讚の念佛を申してゐるあたりを一なく
 りに掠めて、やがて阿夫利山のてつぺんを突抜けて、りゆうり
 ゆうと空にのして行く。

私は安心して、また畦の上に腰をおろす。

一踊踊り終つたと見えて、ふら／＼とまた體を揺りながら
 行く夫婦の館屋の後姿、といつても赤い旗を立てた頭の上の
 盤臺だけが、菜の花の上を流れて行くやうに見える。

朝、青く描く

朝、青く描く
 前田夕暮著、自然
 を題材とする散文
 集、昭和六年（二五）
 二六月刊行。

相馬御風

名は昌治、新潟縣
 の人、文學者、明
 治十六年（一五三）
 生。



觀賞用

二 路 傍 の 草

相 馬 御 風

小學校や、女學校や、中學校などの生徒たちの描いた花の繪
 を展覽會などで多く見るが、それ等の十中八九が、菊とか、ダリ
 ヤとか、朝顔とか、コスモスとか、薔薇とかいつた様などちらか
 と言へば、觀賞用といふ型にはまつた花を寫したり描いたり
 したものであるのには、何時ももの足りなく感じさせられる。
 私たちは、何もさうした種類の花を描く事その事に不満を感
 ずる者ではないが、しかし、少くとも田舎に生活してゐる子供
 たちには、さうした型にはまつてゐる花より以外に、もつとも
 つと多く美しい花があるべきはずの様に思はれ、その點が不
 満に感じられてならないのである。

背戸

特に觀賞の爲に一般的になつてゐる花の美しさは言ふまでもない。しかし、さうした種類の花の外に、わけて田舎では、山にも、野にも、背戸にも、路端にも、數限りなく美しい花が咲くのである。

さうして、それ等の多くの花は、特に注意しないまでも、田舎の子供たちの心を養ひもし、樂しませもしてゐるのである。それであるにも拘らず、彼等の大多數は、いざ美しい花の繪を描かうといふ段になると、それ等の最も親しみの深いはずの花を除外するのである。私たちの不満は其所にある。

「この節の若い者は、草や木の名すらろくに知らない。」私は、嘗てかうした歎聲を、ある山の村の一人の老人の口から聞いて、なるほどと感じ入つたことがあつた。田舎に住んでゐる

かうした

ソロー

ヘンリー・デイヴィッド・ソロー、ウォルデンの湖畔に隱者の生活を樂しんだ、「森の生活」といふ隨筆を著してゐる、エマソンと起居を共にした時があつた。(西曆一八四一—一八六二)

私たちに取つて、最も親しみのある草や木の名——それすらも知つてゐる人の少いといふことは、何といふ情ないことであらう。毎日自分たちの往來する路端に、春に、夏に、秋に、咲く花は随分多くある。さうして、それ等の雜多な草の花は、知らず識らずのあひだに私たちの心に貴い養を惠んでくれてゐる。しかも、私たちの多くは、それ等の名前すらろくに知つてゐない。

かの森林生活で名高いアメリカの哲人ソローは、彼の毎日往來する路端の叢で、その日々にどこで何の花が咲くかを、大概知つてゐたといふことである。さうして、エマソンは、その一事によつても、ソローがいかに自然を愛し、いかに自然の現象に注意深かつたかを十分知る事が出来るといつて、賞讃

芭蕉

なづな



しな

してゐたといふ事である。私たちは、其所までは行き得ないにしても、少くとも毎日自分たちの往來する路傍に咲く花の美しさに心を引かれ、それ等の名前ぐらゐは知つてゐてもよささうなものである。

嘗て私は、芭蕉の、

よく見ればなづな花咲く垣根かな

の句について、こんな事を考へた事があつた。

「よく見れば」——かう芭蕉が言つた時、彼は確に一種の驚を覺えてゐたに相違ない。垣根の下土に何時となしに生えた、あのぺんぺん草の様な見る影もない雜草でさへ、人知れずつつましやかに生きてゐる。あの小さな草にさへ、春が來ればかうして花が咲く。こまかな何のしなもない白い花が咲く。

——思ひがけなく芭蕉がさうした自然の風物に心を引かれたのも、さうして、そのうちに無限の興趣を覺えたのも尤もである。恐らくその場合芭蕉自身も、その經驗によつて、平常の自分に、よく見ない時間の多かつた事の反省が起らないではゐなかつたであらうし、同時に、「よく見る」といふ事の貴さを、彼は恐らく今更の如く驚歎せずにはゐられなかつたであらう。これは自然に就いてだけではない。人間に就いても同じである。

「あなた方が偉いと思つてゐる人の名を書いて御覽なさい。」かういふ先生の間に對して、十中八九の生徒たちの書く名前は、大概きまつてゐる。無論さうした書物で教へられたり、先生から教へられたりした昔や今の偉い人たちの名を記憶し、

定評

それを書くのは結構な事である。しかし、さうした定評のある偉い人たちの多くの名の中へ、一つくらゐ自分自ら偉いと実感した、自分の手近な人の名がはひつてもよささうなものではなからうか。

私たちは、願はくは、見る影もない一莖の草に就いても、限りない自然の美と意味とを味はひたいものである。さうして、それと同じ様に、自分のつい手近にゐる只の人に就いても、限りない人間の貴さを感じたいものである。

(雜草苑)

雜草苑

相馬御風著、隨筆集、大正十三年三月、九月刊行。

三浦梅園

名は安貞、豊後國(大分縣)の人、儒者、寛政元年(一八一九)歿、年六十七。

毀譽

言募る

二三 帚

木

三浦 梅園

毀譽は人の大節なり。然りといへども、世舉りて譽むるにも必ず察すべし。況や一人は譽め、一人は毀るに於てをや。たとへば、訟へ事あらんに、兩方理なりと思へばこそ、互に言募りて止まざるなれ。これを奉行のさばかんに、とにかく一人は勝ち、一人は負くべし。勝ちたる人は奉行を譽め、負けたる人は毀るなり。又、悪しき人なりとも、それに伴ふ人は之を善しと思へばこそ交るなれ。我が善しと思ふをば譽め、我が悪しと思ふをば毀る習なれば、その毀譽によりてその人の善惡も分かち難し。まして人傳などに聞かんことは覺束なきことなり。

月代

昔人ありて、その子をおある寺へ遣はし置きけるに、暫くありて逃歸り、住持の事を毀りけるは、我に『月代剃れ』と言ひければ、例の如く剃りけるを、剃りやうの別きて悪しとていたく叱

三浦安貞先生著

梅園叢書 全三冊

浪華書肆

文海堂 合梓 宋榮堂

梅園叢書

りぬ。またある時、我が厠に行きけるを見て、『何とて厠へは行きし、不届なり。』

向後厠へ行くべからず。』と言ひ、その後、朝飯焚くとて味噌を摺りけるに、之も味

きこえず 理不盡

向後

噌を摺るがきこえぬとて、理不盡の次第、殆ど困却に及ぶ。』と語りけるを、親聞きて、『さりとは、出家にも似合はざることなり。』とて、急ぎ山に登り、右のことどもを詰りけるに、住持聞きて、『いや

指南

蘭原 長野縣下伊那郡智里村の地名、歌枕。

帚木

傳説上の木である、歌によく歌はれた。

日蓮宗

佛教の一派、日蓮を祖とす。

眞宗

佛教の一派、詳しくは浮土眞宗、門徒宗、一向宗ともいふ、親鸞を祖とす。

いやさやうのことにては無し。常々髪能く剃る故、この頃剃らせけるに、いたく眠りて、これ見給へ、かくの如く、頭へ切込み候。』とて、疵を見せ、『その上厠も常の厠へは行かて、客の爲に設けたる方へ行き、味噌も常の味噌をさしおき、客に使ふべきを使ふ。是等の指南をこそ返す返すも致しつれ。』と言ひけるにぞ、親も理に服しけるとぞ。信濃の國蘭原そのはらといふ處に木あり。遠くより見れば、帚の形の如し。依つて之を帚木はきぎと言ふ。されど近づきて見れば、帚に似たる所も無くうち繁れるとかや。遠きより見聞くと、親しく見聞くと、多くこの帚木の類なるべし。

凡そ、人の物を批判するも、我が好む所を譽むるものなり。俳士に歌人の評判させ、日蓮宗に眞宗の評判させんに、いかで

義經

源氏、義朝の第九子、頼朝の弟、平家追討に功あり、文治五年(二八五)衣川の館にて自殺、年三十一。

俱に天を

父ノ讐ニハ與ニ共ニ天ヲ戴カズ。(禮記)

秀衡 陸奥の豪族藤原秀衡

亡父 源義朝

法皇 後白河法皇

宸襟 梶原景時

頼朝の臣、平家討伐の時、四國に渡るに際し義經と逆櫓のことで争つた。

詮なし 仕業

か公論あるべき。同じ道を二人して行かん、一人は健にして、この道近しと言ひ、一人は疲れて遠しと言はん。これ道に違あるにあらざ、心に違あればなり。譬へば、義經のことを論じて、義經を善しと思ふ人の言はんには、「この人、誠に幼より常人にてはおはしまさざりけり。俱に天を戴かざる讐を報ぜんと、夜々寺を出でて、太刀打を學び、遂に秀衡が人と爲りを見て、是により、つひに飛ぶ鳥も落すばかりなる勢の平家を、二三年の中に攻亡して、亡父の恥辱を雪ぎ、法皇の宸襟を休め奉り、絶えたる源氏を興し、兄頼朝を天下の武將と仰がしめたり。」と言ひ、又義經に不満の人は、「なるほど、この人、戦争に一とほりは自由を得たる人ながら、平家を亡し、恣に振舞ひ、梶原景時と詮なき口論、大將たらん人の仕業に似ず。然るを都に逃上り、頼

院旨

雪と墨

公の論

梅園叢書

三卷、三浦梅園著、教訓を主とした隨筆集、安政二年(三二五)刊行。

朝追討の院旨を申し受け、芳野山にて一人の靜しづかに別れかね、兒女子の涙を絞られき。」など言ひ、善しと思ふ人の論と、惡しと思ふ人の論とは、誠に雪と墨となるべし。その惡しき所を捨てて善き所を取る、これ人を用ふるの道なり。その惡しきをば惡しとし、善きをば善しとする、これ公の論なり。又、分相應に就いて言ふことあり。鼠は甚だ大なりと言ふとも、牛の小さきには及ばじ。蛇を甚だ短しと言ふとも、蚯蚓よりは長かるべし。故に、人を善しと言ひて譽むるも、惡しと言ひて毀るも、その場その場を考ふべきなり。

(梅園叢書)

今井邦子

長野縣の人、歌人、
明治二十三年(五
五)生。

二三 獅子と虎と私

今井 邦子

動物園は私の東京に於ける好きな處の一つである。動物園といつても、私は特にそのなかで、獅子と虎とを見にゆく事が好きだと言つてもよいかもしれない。と言つて、私はさう度々動物園見物に出かける譯ではない。大抵春のお花見の時に行くくらいなものである。上野は私の家から電車の都合がよくて、乗換なしに行く事が出来るのと、他の花見場所程いやな混雑がないので、私の家ではお花見といへば、子供を連れて上野にゆくのが例で、さうして花を見ながら子供八分の人の群に混つて、動物園にはいるのである。

「お母さん、又獅子と虎でせう。」

上野

東京市下谷區上野公園、上野動物園がある。

ひやかす

威厳

眼中におかない

かう言つて私をひやかす今年女學校の二年生になつた長女が、ちよ／＼歩きを始めた頃からの毎年の例なのである。獅子は全體に威厳があつてめつたに物に動じない風がある。その顔が第一に、人間などはあまり眼中においてないといふ様子がある。私はこの様子が實に氣に入つてゐるのである。

それは幾年前の事であつたか、或時、私は動物の歌を作る爲に一人で大變おそくまで、もう動物園もそろ／＼しめる頃になるまでも、そこに遊んでゐた事があつた。太陽は夕方の色になつて、西の方へ大へんかたむいてゐた。いろ／＼の鳥がさわがしく一しきり鳴聲をたてるのも、もの寂しい思ひのする時であつた。最後に、獅子の檻のある丘へ再び上つてゆく

と、獅子は人造岩の一番高い處にのぼつてゐて、あの威嚴のある顔をじつと夕日に向けて、少しも動かない姿勢をとつてゐるのであつた。

「獅子は夕日を見てゐるのかしら……」

私はかう思つて熱心にその方を見續けてゐたけれど、やがて私の方が根氣負けがするほど、獅子は動かさず立ちつくしてゐるのである。その間、まだ残つてゐた幾人かの人々も、それを見て、しばらく見て、見飽いて、この丘を去るのであつた。

「やあ、獅子が岩にのぼつてゐるぞ。」

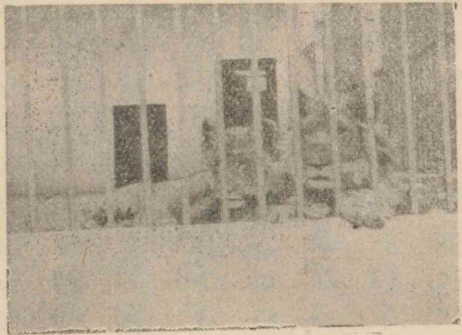
「石を投げて見る、怒るかな。」

かう言つて、ある人々は小石をひろつてばら／＼と投げて見るのである。石は格子にあたつて上に空しくはねかへつ

根氣負け

神経質な

捨ぜりふ



獅子

たり、又は檻のたゞきの上に神経質な音をたてて落ちてしまひ、まれには獅子の體にあたつた。……それでも、獅子は何事も知らぬかのやうに、じつと夕日に向かつて、時々靜かに寂しくまた、きをしてゐるのであつた。人々はすぐ飽いて、捨ぜりふを言つて丘をくだつた。最後には私も疲れてしまつた。さうして、一つには、時のおくれるのに心が急いで、つひにその儘そこを立去つたのであつた。しかし、その時、岩の上に四足を確と踏まへて、じつと夕日に向かつてゐる獅子の姿には、獸といふよりも人間の、しかも優越孤

優越孤獨

獨の高い境地に、みづから寂しくて輝いてゐる古將軍の姿などに現れる、何とも言へぬ崇高な感を受けるものがあつた事を私は今も忘れない。

「獅子は怖しい動物だらうか。」

私は時にかう自問する。

「やはり怖しい動物であらう……けれど、たしかに、げすな動物ではない。」

私はかう自答する。

今年の花見に行つた時、獅子は四頭になつてゐて、それが四頭とも全く勞れたやうな形をして、べたり／＼と石の上に眠つては、時に目を寂しくみひらいてゐた。その有様が、どこか自分等の運命を悟つて、動じない所があるやうであつた。櫻

自答する

今年

動じる

悟入

の花がひらく／＼と心なくその背に散りかゝる風情は、實に一幅の繪の如く、又、ある悟入の世界を表示するかの如くであつた。

獅子を見てしまへば、必ず次は虎にゆくのが私のいつもの順路である。同じ猛獸といひながら、その性をかくも異にしてゐるのかと思へる程、虎は、一見直ちに猛惡の相をなしてゐる。その顔にも、その姿にも、悠々とした威嚴といふやうなものは影さへない。あくまで、人に對し、他に對して、心構をなし、窺ひ寄る陰險な心を現してゐる動物



虎

猛惡

心構
陰險な

である。私はこの虎の徹底的な陰険さにもまた興味をもつたのである。

「いやだな、怖い顔をしてゐる……」

見物人もかう言つて通る。虎は獅子のやうに悟つた風は少しもない。望のない檻のなかを絶えずのそ〜と廻り歩き、時にふと立止つて、何物をか聞かんとする風をする、あくびをする、時に低く唸る……私はその動作を見てゐると、思はず苦笑ひしたくなる。

「獅子とは違ふな。段ちがひだ。獅子のやうに悟らうとしても、どうしても悟り切れないものがある。」

私は心でかうつぶやいた。

今年行つた時は、丁度、正午時であつた。日頃檻に飼はれて

段ちがひ

屈托な

殺風景な

ゐるいろ／＼な動物が、屈托な一日々々の連続の中、せめて生物らしい心呼びさまされる食事時であつた。鳥は奇聲をあげ、猿は木から飛降りて一方ならぬ騒を演じてゐた。

虎の檻を見ると、殺風景なブリキの大箱に何かの肉と水のやうなものを入れて、あてがはれてゐる。その箱に、柔かくしなやかな……それ故に一層無氣味な大舌をのぼして、べろりべろりと肉をなめつゝ、食べてゐた。鋭くふとぶとしいその歯牙の根から、ずつと血に染まつた大きな口をあけて、時々満足さうに舌なめずりをしつゝ。

食事は終つた。一ばん端の大虎の次に、標札には豹と書いてあつたけれど、なかには牝虎らしいものが居る……その牝虎は食後の興奮に己をもてあますかの如く、床にくるりと

背をすつてころがり起き、怖しい唸をあげ、人を目かけて格子の扉の方へ進んで来た。その一瞬には、全くそこに鐵格子があり、さらにガラスの窓を隔てて居る事を知りつゝ、一同は後ずさりをした程であつた。牝虎は群衆の中に赤兒を見ると、一層いらだたく唸を強めたと見る一瞬、ぼんと身を躍らせて天井高き格子の上までとび上り、どんと床の上へ落ちてくるのである。このすさまじい光景は實に幾度となく續いてゐた。虎の居る場所は奇を好む人、又怖いもの見たさの人々で押すなぐの大騒であつた。

「母さん出ませうよ、お晝たべませう。」

かう子供たちに促されて外に出たが、私はそのすさまじい光景にまだ心が残るのであつた。

(茜 草)

茜 草

今井邦子著、隨筆集、昭和八年(一九三三年)一月刊行。

鈴木文史朗

名は文四郎、銚子市の人、朝日新聞社員、明治二十三年(一九一〇)生。

二四 新聞の話

鈴木文史朗

人間には、自分の住んで居る處の周圍に起きる事件を早く知りたがり、又それを知つた場合は、すぐ他人にこれを知らせたがる本能があります。人類が太古野蠻な時代に、山間、原野に部落を作つて、鬭争しながら生活して居た時代でも、隣の部落にどういふことが起りつゝあるかを知ることが、興味の上からばかりでなく、彼等にとり自衛上最も必要であつたに相違ありません。隣の部落の酋長が死んだとか、急に弓矢を澤山作つたとかいふやうなことを知つた者は、それを直ちに自分の仲間に觸廻つて歩いたことは容易に想像されます。

新聞の發生は、かうした人間の本能に基づくものであります。

自衛 酋長

實質的

告示

中葉

印刷機の發明

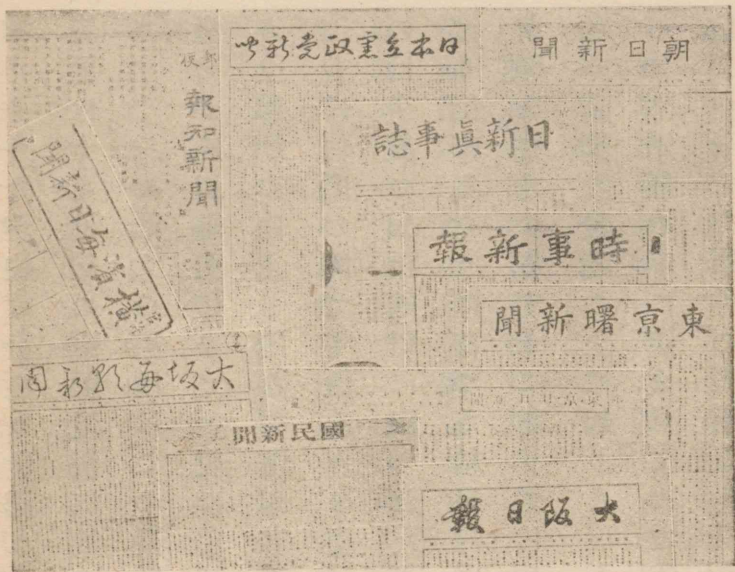
西曆一四三八年頃
ドイツ人グウテン
ベルヒによつて活
字印刷は創められ
た。

週刊

す。人間が文字を使用し始めた時は、實質的には現代の新聞の第一號が、何等かの形で、例へば個人間の手紙とか、政府の告示とかに現れ出した時であり、十五世紀の中葉に印刷機がドイツで發明された時は、現代の新聞の形態を持つた新聞が現出する豫告の時でありました。

現代の新聞は、イタリー、ドイツ、イギリス、フランス等で、十六世紀の中葉頃から漸次發達し出したものであります。その創始時代には、何れも週刊の形で發行され、紙面にはその發行都市を中心として起きた政治上の事件などを主として、聞かまゝ、見るがまゝ、思ふがまゝ、書きつらねるといふ程度のものであります。その後、世界各国の進歩變轉は同時に各國の新聞を異常急速に發達せしめ、遂に今日のやうに、二十世紀は

機構



明治初期の新聞

一面に於て新聞の時代」といはれるまでになつたのであります。日本でも明治維新と共に、現代新聞の機構は西洋文明の一つとして輸入され、今日では日本の大新聞は世界でも第一流の域に達し、歐米人を驚歎せしめてゐる實況にあります。

新聞は大體以上に述

庶民階級
知識欲
普遍化する

知識階級

報道

べたやうな理由で発生し、發達して來たのでありますが、その發展は十九世紀の中頃以後に於て、殊に目覺しいものがあります。その最大の原因は、この期間に世界何處の文明國でも、教育が庶民階級にまで一般に普及し、人間の知識と知識欲とが全體的に向上し、讀む習慣が普遍化した爲であります。昔は何處の國でも、讀んだり書いたりすることの出来るものは、少數の知識階級に限られたものでしたが、それが、殆ど誰でも出来るやうになつた結果、何處の國でも國民の大多數が新聞を要求するやうになりました。この結果、注目すべき現象が新聞の發達の上に起りました。といふのは、新聞が少數の知識階級のみで讀まれてゐた時代は、政治や外交などの國政を主とした事件の報道とか、殊にそれに關する意見を中心

としたものであつたのが、讀者の層が一般庶民階級にまで擴つた結果、新聞が取扱ふ事件の範圍は、著しく擴大されるに至りました。

ニュース
不文律

故意に
意識的に

國家社會の各方面に起きる日常の事件で、それが讀者に直接間接何等かの利害關係があり、或は興味を惹くものであれば、新聞はさうしたニュースの報道に全力を注ぐやうになりました。即ち、昔は、政治外交等、國政に關した記事や、それに関する論說等に主力を注いで居たものが、今日では、何を措いても、ニュース第一といふのが、全世界を通じて新聞の不文律のやうになつて居ります。

この新聞紙の使命の變遷は、新聞の製作者が故意に或は意識的にやつたからではなく、前に述べたやうな理由で、時代が

警句

變ると共に變つて來たものであります。だから、現代の新聞記者は、意見を述べたり、批評したりする前に、先づ第一にニュースを捉へてこれを最も敏速に報道することが、最初の任務となつて居ます。「昔の新聞記者は筆で書いたが、今の新聞記者は脚で書かねばならぬ」といふのも、現代新聞のニュース第一主義を言現した警句であります。

定義

さて、それなら、新聞の生命とされるニュースとは何ぞや、といふことが問題となります。これに關し、無数の書物が書かれ、議論が出てゐて、一定した定義はありませんが、大摺みにいへば、

一、實際に起きた事件で、日常平凡なことでなく、その發生が、時間的には新しく、地理的には近いこと。さうして、發表

が時機に適して居ること。

二、出来るだけ多くの讀者に利害關係があり、興味を與へ、且

風教

具體的に

風教上に惡影響なきこと。

これを具體的にいへば、根據のない想像は、それが如何に珍奇なものでも價值はありません。又、毎日の新しい事實、例へば太陽が東から昇り西に没するといふことは、人類にとり恐らく日毎の最も重要な事實であります。それは日常平凡なことであるから、ニュースにはなりません。猫が鼠を嚙殺したといふことも報道の價值はありませんが、その反對のことが起きたら、すばらしいニュースであります。

又、如何に現實に起きたこと、珍しいことでも、それが餘り古いことであつたり、遠隔の地の出來事であつたり、風教上に惡

丹波
國名、京都府の一
部と兵庫縣の一
部。

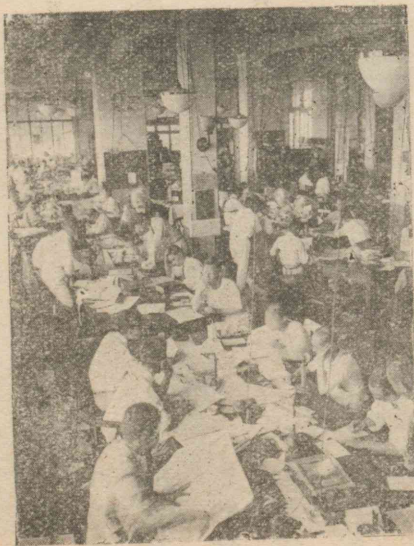
いことは價值がありません。四國の人には、北海道の千戸の
火車よりも、自分の近くの十軒の火車の方が大きなニュース
です。昨年、南アフリカの山中で五本脚の猿が発見されたとい
ふことよりも、昨日、丹波の山中で三本脚の猿を捕へたといふ
方が、日本の新聞の讀者には二倍の興味があります。さうし
て、この興味の有る無し、或はその程度の大小を判断するには、
そのニュースがどれだけ多くの讀者により熱心に讀まれる
かを、判定することによつて決るのであります。今朝、或は昨
日起きたといふ政變、總選舉、國際會議の決定殺人事件、大地震、
水害等の記事などが、新聞により常に大きく扱はれるのは、こ
の爲であります。

大體からいふ標準の下に、新聞のニュースは蒐められ、編輯

政變
國際會議

可能な
大量生産

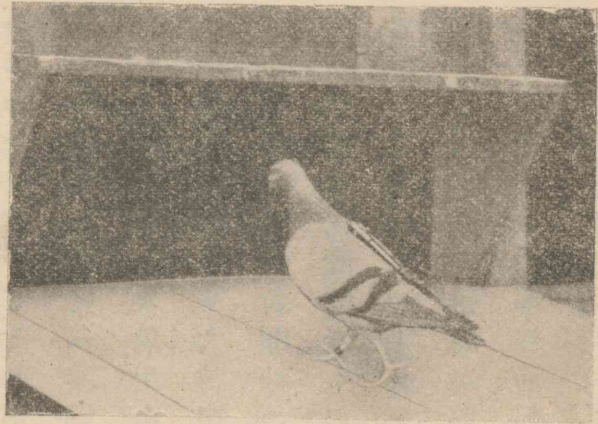
されるのであります。新聞の誇とするのは、速報といふところ
にありますが、それが爲には大新聞社に於ては、その國に
於て可能なあらゆる設備が用意され、又常に改善されつゝあ
ります。分業と大量生産
とは現代産業の一大特徴
であります。大新聞社の
組織はその代表的なもの
であります。ニュースを
蒐める爲には、編輯局があ
り、そこでは政治部、經濟部、
社會部、外報部、外國或は外交關係のニュースを扱ふ、地方通信
部、地方のニュースを扱ふ、寫眞部等をはじめ、それ／＼幾つか



編輯室

紙型

現像



鳩書傳

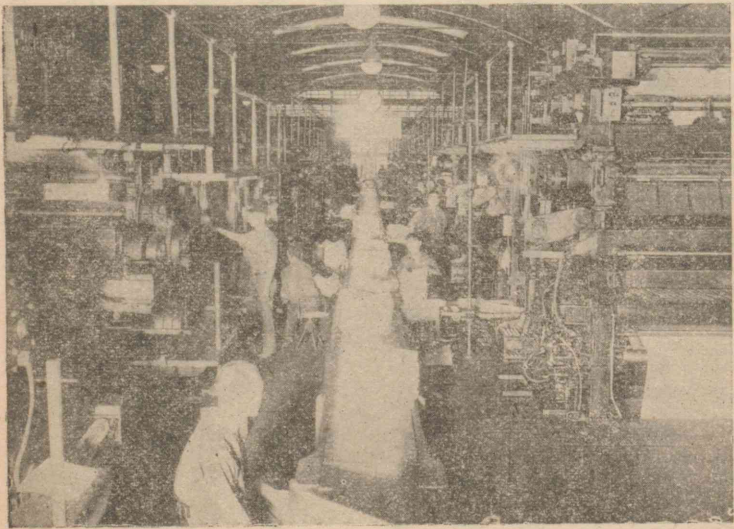
の部門があつて、各専門的に材料を蒐め、蒐つたニュースを編輯局(整理部ともいふ)でこれを取捨選擇し、見出しを附けて印刷部へ廻し、そこでは直ちにこれを活字に組み、紙型にとり、現代高速度印刷の最高峯ともいふべき輪轉機により、一時間十萬枚以上の速度で印刷されます。そこから新聞が印刷されて出て来る光景は、文字通り急流の奔出するが如きものであります。

ニュースを原稿用紙に書き、寫眞を現像室に持運んでから、そ

科學

通信網

れが新聞に印刷されるまでは、急ぐ場合は二三十分しか要しません。かうして敏活を期する爲には、ニュースをとり、これを急送する爲に、大新聞社では飛行機、傳書鳩、寫眞電送機等、最新科學のあらゆる設備が活用され、又、國內と國外とを問はず、重要な都市に社員を常置して、蜘蛛の巣を張る如く所謂通信網を



機轉輪

細大となく

接受する

張つて、ニュースは細大となくそれに引つかゝるやうに工夫されてあります。そこで得られたニュースは、電話や電信で刻々に本社に送られるので、本社には常に夜でも宿直員が居て絶えずこれを接受し、重大なニュースは、何時でも號外として發行されます。事實晝夜の別なく一年中活動して居るといつてもいいのは、新聞社であります。

この外、新聞社には營業の方面があることを忘れてはなりません。即ち編輯局に對して、營業局があり、これは大體販賣部と廣告部とに分かれて居ります。販賣部は新聞を賣廣め、讀者の手に配達して、その代金を集めるのを仕事とします。廣告部は新聞へ載せる廣告を集めるのが任務で、新聞がその用紙代と大した相違のない安い値段で賣れるのは、この廣告

公機
幫助

女子國文新讀本

千口憲綱、高等女
學校用國語教科書
昭和八年二月刊行

による収入利益があるからであります。日本の大新聞では、販賣と廣告とによる収入利益は各半ばして居ます。

健全な新聞は常に獨立した言論報道の公機であります。その獨立性を保つ爲には、何者の幫助にも與らないことが必要で、それには營業として能率を擧げることが必要なのであります。よき新聞はよく賣れ、よく賣れる新聞は多くの廣告を集め、この収益によつて益、よき人材を集め、設備を改善して行けるので、この意味で、新聞社にとり、編輯と營業は車の兩輪のやうな關係にあるといへます。

(女子國文新讀本)

杉田玄白

名は翼、醫師、蘭學者、文化十四年(一七七七)歿、年八十五。

その日

明和八年(一八二二)三月四日。

刑場

千住(東京市足立區千住町)骨ヶ原(小塚原、江戸の刑場の一つ)。

とてものことに

良澤

前野氏、醫師、蘭學者、享和三年(一八二二)四月、年八十一。

淳庵

中川氏。

二五 蘭學事始

杉田玄白

さて、その日の解剖事終り、とてものことに骨骸の形をも見るべしと、刑場にありし骨共を拾ひとりて、數々を見しに、舊説とは相違にして、たゞ和蘭圖に差^{ちが}へる所なきに、皆驚嘆せるのみなり。

歸路は良澤淳庵と翁と、三人同行なり。途中にて語り合ひしは、「さて、今日の實驗、一々驚き入る。且、これまで心附かざりしは恥づべき事なり。苟も醫の業を以て互に主君々に仕ふる身にして、その術の基本とすべき吾人の形體の眞形をも知らず、今まで一日々々この業を勤め來りしは面目もなき次第なり。何とぞ、この實驗に基づき、大凡にも身體の眞

申譯

同情
ターフル・アナトミア

和蘭語の人體解剖書、「解體新書」の原書。

通詞

宿願

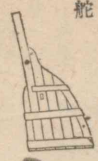
憤然と
一精

理を辨へて醫をなさば、この業を以て天地間に身を立つるの申譯もあるべし。」と、共に嘆息せり。良澤も、げに、尤も千萬、同情の事なり。」と感じぬ。その時、翁申ししは、「何とぞこの『ターフル・アナトミア』の一部新に翻譯せば、身體内外の事分明を得、今日療治の上の大益あるべし。いかにもして通詞等の手をおかず、よみ分けたきものなり。」と語りしに、良澤曰く、「予は年來蘭書よみ出したき宿願あれど、これに志を同じうする良友なし。常々これを慨き思ふのみにて日を送れり。各がたいよ、これを欲し給はゞ、我前の年長崎へもゆき、蘭語も少々は記憶し居れり。それを種として共々よみ掛るべしや。」といひけるを聞き、「それは先づ喜ばしきことなり。同志に力を戮せ給はらば、憤然として志を立て、一精出し見申さん。」と答へたり。良

なのめならず
善はいそげ

良澤が宅

江戸鐵砲洲 奥平
家の藩邸、今の東
京市京橋區新榮町
七丁目あたり。



茫洋と

澤これ聞き、悦喜なのめならず。「然らば善はいそげといへる俗説もあり、直ちに明日私宅へ會し給へかし。如何やうにも工夫あるべし。」と、深く契約して、その日は各宿所宿所へ別れ歸りたり。

其の翌日、良澤が宅に集り、前日のことを語り合ひ、先づかの「ターフルアナトミア」の書にうち向かひしに、誠に艱難なき船の大海に乗出ししが如く、茫洋として寄るべきなく、唯あきれにあきれて居たるまでなり。されども、良澤は豫てより此の事を心に掛け、長崎迄も行き、蘭語並びに章句、語脈の間の事も少しは聞覚え、聞習ひし人といひ、齢も翁などよりは十年の長たりし老輩なれば、これを盟主と定め、先生とも仰ぐこととなしぬ。翁は、いまだ二十五字さへ習はず、不意に思ひ立ちしこ

内象

かたぐ
解體新書

蘭醫キユルムスの
解剖圖譜を翻譯し
たもので、西洋解
剖書翻譯の最初の
もの、前野良澤・
杉田玄白・中川淳
庵等の譯。

助語



杉田玄白木像

となれば、漸くに文字を覚え、かの諸言をも習ひしことなり。扱、此の書を読み、いかやうにして筆を立つべきかと談じ合ひしに、「とても始より内象の事は知れがたかるべし。此の書の最初に仰伏全象の圖あり。これは表部外象の事なり。其の名處は皆知れたることなれば、其の圖と説の符號を合其の頃は、助語の類も何れが何やら心に落ちつきて辨へぬ

彷彿と

ことゆゑ、少しづつは記憶せし語ありても、前後一向にわからぬ事ばかりなり。譬へば「眉といふものは目の上に生じたる毛なり」とあるやうなる一句、彷彿として長き日の春の一日には明らめられず。日暮るゝまで考へ詰め、互ににらみ合ひて、僅か一二寸の文章、一行も解し得ざることにてありしなり。又或日、鼻の所にて「フルヘツヘンドせしものなり」とあるに至りしに、此の語わからず。「これは如何なる事にてあるべき」と考へ合ひしに、いかにもせんやうなし。其の頃、譯辭書といふものなし。やうやく長崎より良澤求め歸りし簡略なる一小冊ありしを見合はせたるに「フルヘツヘンド」の譯註に「木の枝を斷ちたる跡、其の跡フルヘツヘンドをなし、又庭を掃除すれば、其の塵土聚り、フルヘツヘンドす」といふやうに讀み出せり。

譯註

連城の壁

蕙王ノ珠ハ光能ク
乗ヲ照シ、和氏ノ
壁ハ價連城ヨリモ
重シ。(成語考)

シンネン
「神經」の意、オラ
ンダ語。

「これは如何なる意味なるべし」と、又例の如くこじつけ考へ合ふに、辨へかねたり。時に、翁、思ふに、木の枝を斷りたる跡、癒ゆれば堆くなり、又掃除して塵土集れば、これも堆くなるなり。鼻は面中に在りて堆起せるものなれば、「フルヘツヘンド」は「堆し」といふことなるべし。然れば、此の語は「堆し」と譯しては如何。といひければ、各これを聞きて、甚だ尤なり、「堆し」と譯さば適當すべし」と決定せり。其の時のうれしさは、何にたとへんかたもなく、連城の壁をも得し心地せり。此の如き事にて、推して譯語を定めたり。其の數も次第次第に増しゆくこととなり、良澤のすてに覺え居し譯語書き留をも増補しけるなり。其の中にも「シンネン」などいへる事出てしに至りては、一向に思慮の及びがたきことも多かりし。

不昧者

「これらは亦ゆく／＼は解くべき時も出て來ぬべし。先づ符號を附置くべし。」とて、丸のうちに十文字を引きて記し置きたり。其の頃知らざることをば「レ十文字」と名づけたり。毎會いろ／＼に申し合はせ、考へ案じても、解すべからざる事あれば、其の苦しきの餘り、「それも又、レ十文字、レ十文字」と申したりき。然れども、爲すべき事は固より人により、成るべきは天にありの喩の如くなるべしと、此の如く思を勞し、精を研^すり、辛苦せしこと、一箇月に六七回なり。其の定日は怠なく、わけもなくして各相集り、會議して讀合ひしに、實に「不昧者は心」とやらにて、凡そ一年餘も過しぬれば、譯語も漸く増し、讀むに隨ひ、自然と彼の國の事態も了解するやうにて、後々は其の章句の疎^まき所は、一日に十行も、其の餘も、格別の勞苦なく解し得るやう

參向

にもなりたり。尤も毎春參向の通詞どもへも聞糺ししこともあり。又其の間には解屍の事もあり、獸畜を解きて見合はせし事も度々なりき。

同臭

此の會業怠らずして勤めたりし中、次第に同臭の人も相加里寄りつどふことなりしが、各志す所ありて一様ならず。翁は一たびかの國の解剖の書を得、直ちに實驗し、東西千古の差^{ちがひ}あることを知明らめ、治療の實用にも立て、世の醫家の業にも發明ある種にもなしたく、一日もはやく此の一部を用立つやうになし見たしと志を起しし事ゆゑ、他に望む所もなく、一日會して解する所は其の夜翻譯して草稿を立て、それに就きては、其の譯述の仕方を種々様々に考へ直しし事、四年の間に、草稿は十一度まで認めかへて板下に渡すやうになり、遂に「解體

板下

腑分

首唱す
通稱

嚙矢

蘭學事始

二卷、杉田玄白著、
「解體新書」翻譯の
苦心及び當時の蘭
學興隆の機運を語
つたもの、文化十
二年(一八四五)成る、
明治二年(一八六九)刊
行。

新書翻譯の業成就したり。

抑、江戸にて此の學を創業して、腑分ふぶんといひ古りしことを新に解體と譯名し、且、社中にて誰いふとなく蘭學といへる新名を首唱し、日本國中の通稱ともなるに至れり。是今時のごとく隆盛となりし嚙矢なり。今を以て考ふれば、是迄二百年來、かの外科法は傳はりしなれども、直ちにかの醫書を譯するといふ事は絶えてなかりしが、此の時の創業、不可思議にも、凡そ醫道の大經大本たる身體内景の書にて、これが醫書新譯の起始となりしは、不用意を以て得し所にて、實に天意とやいふべき。

(蘭學事始)

大町桂月

名は芳衛、高知市
の人、文學者、大正
十四年(一九二五)歿、
年五十七。

清淨

敷島の

本居宣長の歌。
愛誦す

清暉
粹

二六 清淨の國

大町桂月

我が國の特質は少からざれども、特質中の特質ともいふべきは、清淨の國なること是なり。

日本國民は一般に清淨の美を愛す。その心清淨なり、その衣、その食、その家清淨なり、その國一體が清淨なり。清淨の美を解せざるものは、到底日本を解するを得ざるなり。

敷島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山櫻花
この歌が日本人一般に愛誦せらるゝは、國民精神の清美を歌ひ出でたればなり。一體、朝は一日の中にて最も清々しき時なり。空に些かの曇もなき朝、東天に朝日の輝き出づるは實に清爽なるものなり。その清暉に、櫻花中の粹たる山櫻の

映發す

散りぎは。

枝葉のこと

田子の浦ゆ

山部赤人の歌、萬葉集卷三にある。

田子の浦

静岡縣富士郡元吉原村の海濱。

扶桑

八朶玲瓏

喧傳す

琴線

月雪の

榎本其角の句。

ぱつと映發せるは、なほさらに清々しきものなり。朝晴天、日の出山櫻、これだけの好き道具がそろはば、何人か爽快を覺えざるべき。これ即ち大和魂の本體なり。大和魂は即ち清淨の粹なり。櫻花は散りぎはが潔し。日本男子の死を惜しまざるに似たりなどいふは枝葉のことのみ。

田子の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ富士のたかねに雪は降りける

綠波一面、鏡の如き田子の浦、そのあなたに何處より見ても形の變らざる扶桑一の靈山の、八朶玲瓏、天をさゝげて立てるは、これまた清淨の極みにあらずや。この歌が名歌として世に喧傳せらるゝも、畢竟この美の琴線に觸れたればなり。

月雪の中や命のすてどころ

白うして

十四夜
元祿十五年(三三三)十二月十四日の夜。

寒月

氷刃

烈士

吉良邸

吉良義央の邸、江戸(東京市)本所松阪町。

其角

俳會

榎本氏、寶井氏ともいふ、近江國滋賀縣の人、俳人、寶永四年(三三六)歿、年四十七。

血性

心解す

大高子葉

大高源吾のこと、四十七士の一人、元祿十六年(三三三)歿、年三十二。

無量

感慨

眞況

心の結晶

積雪白うして四邊に聲なく、十四夜の寒月獨り大いに冴えたり。この夜、この雪を踏み、この月光を浴びつゝ、氷刃をきらめかして亡君の仇を報いんと討入るは、決死の四十七烈士。

天も清し、地も清し、人も清し。當夜吉良邸の隣屋敷にて催されし俳會に列せし其角その人は、元來血性の快男子にして、清淨の美を心解せる人なり。而して、義士の一人たる大高子葉は實にその俳友たり。月清きその雪の夜、無量の感慨は發してこの十七文字となる。實によく復讐の眞況と本體とを捉へ得て、清淨の美を極めたりと謂ふべし。

歌も俳句も秀逸と稱せらるゝものは、多くはこの清美を捉へたるものなるが、その他の美術文藝一つとしてこの心の結晶ならざるはなし。花に對する感じの如きも亦然り。近時

外國趣味
妖艶なり

日光東照宮

栃木縣上都賀郡日

光町にある、徳川

家康を祀る、別格

官幣社。

浅草の観音堂

東京市浅草區にあ

る浅草寺。

高知る

西行

俗名佐藤義清、歌

僧、建久元年(二八五

〇寂、年七十三。

西行の歌

何事のおはします

かは知らねどもか

たじけなきに涙こ

ぼる、(西行作と

傳へ言ふ)。

素質

滄海

外國趣味の入來るにつれて、妖艶なる草花も輸入せられたれど、梅や、櫻や、蓮や、菊や、水仙や、昔も今も日本國民の一般に愛する花は何れも清淨なり。建築に於ても亦然り。日光の東照宮、浅草の観音堂を見る時、我々日本人はたゞ華麗を感じるのみにして、尊さを感じることを薄し。然るに、一たび去つて伊勢の神宮に詣でんか、千木高知れる建築、清淨の美を極めて、そゞろに西行の歌のしのぼるゝを覺えずんばあらず。若し伊勢の神宮に向かつて、壯大を求め、華麗を求むるものあらば、これ眞の日本國民たる素質に缺けたるところある者と謂はざるべからず。

滄海の中にありて、山青く水清き我が日本は、土地そのものがすでに清淨なり。開闢以來、未だ曾て外國に汚されざる我

しかのみならず

風流

もののはれ

君子國

宜なり

桂月全集

十二卷、田中實太

郎編、大正十一年

(三三)五月、大正

十二年(五八)七

月刊行。

が歴史が、すでに清淨なり。他民族の血液を多く混ぜざる我が民族の血統が、すでに清淨なり。しかのみならず、我が國民は、善を好み、惡を憎み、正に就きて邪を排し、直を愛して、曲を嫌ひ、弱を扶けて強を挫き、よく忠に、よく孝に、よく義に、よく勇に、風流をさへ解して、もののはれを知れる清淨なる人民なり。我が日本が古來東海の君子國と呼べるゝも、亦宜なるかな。

(桂月全集)

女子新國語讀本 新制版 卷四終

國語假名遣表

わ・は

語の上でわ・はは互に紛れない。語の中と下とで紛れる。左の外ははと書く。

- あわ(泡・沫)
- みなわ(水沫)
- あわつ(周章)
- あわただし(倉皇)
- いひわけ(言分)
- のわけ(野分)
- おひわけ(追分)
- うらわ(浦回)
- しまわ(島回)
- かわく(乾・渴)
- くつわ(轡)
- はにわ(埴輪)
- くわわ(慈姑)
- ことわざ(諺)
- しわざ(爲業)

ことわる(斷・理)

- こわいろ(聲色)
- こわだか(聲高)
- こわね(聲音)
- さわぐ(騒)
- さわやか(爽)
- しわ(皺)
- しわし(吝)
- すわる(坐)
- たわし(束藁子)
- たわむ(撓)
- たわむに(撓)
- たわやか(嬋妍)
- たわやめ(手弱女)
- たわら(俵)
- はらわた(腸)
- ひわ(驪)
- ゆわう(硫黄)
- よわし(弱)

かよわし(弱)

いわし(鱷)

ゐ・い・ひ

語の上ではゐ・いが互に紛れ、語の中と下とではゐ・い・ひが互に紛れる。左の語の外はひと書く。

- ゐ(井)
- ゐげた(井桁)
- ゐど(井戸)
- ゐせき(井堰)
- ゐなか(田舎)
- ゐ(居)
- ゐざり(膝行)
- かもゐ(鴨居)
- しきゐ(岡)
- くもゐ(雲居)
- くらゐ(位)
- しばゐ(芝居)
- とりゐ(鳥居)
- まどゐ(團欒)

もとゐ(基)

ゐ(猪・亥)

ゐのしし(猪)

ゐのこ(豕)

いぬゐ(乾)

ゐ(胃)

ゐる(率る)

ひきゐる(牽る)

あゐ(藍)

くれなるゐ(紅)

あぢさゐ(紫陽花)

くわゐ(慈姑)

まゐる(参る)

おゐ(老)

むくい(報)

え・ゑ・へ

語の上ではえ・ゑが互に紛れ、語の中・下ではえ・ゑ・へが互に紛れる。左の語の外はへと書く

糸(繪)
 糸がく(畫がく)
 糸のぐ(繪具)
 糸かき(畫工)
 とも糸(柄繪・巴)
 糸(餅)
 糸ほし(烏帽子)
 糸む(笑)
 糸がほ(笑顏)
 糸くぼ(醫)
 糸つぼ(笑壺)
 糸じ(衛士)
 糸ふ(酔ふ)
 糸ひとれ(醉客)
 こ糸(聲)
 つく糸(杖)
 つく糸(机)
 ゆ糸(故)
 十糸(据)
 十糸ぶろ(据風呂)
 いしす糸(礎)
 す糸(末)

す糸ひろ(末廣)
 こす糸(木末・梢)
 う糸(飢・餓)
 う糸(植)
 う糸ぎ(植木)
 う糸こみ(前栽)
 ち糸(智慧)
 元(兄)
 元と(兄弟)
 きの元(甲)
 ひの元(丙)
 つちの元(戊)
 かの元(庚)
 みづの元(壬)
 元(枝)
 元だ(枝)
 しづ元(下枝)
 元(江)
 いろ元(入江)
 ふ元(笛)
 ささ元(蝶螺)
 は元(映)

ゆふば元(夕映)
 も元(萌)
 も元ぎ(萌黃)
 み元(外見)
 は元(生)
 ひこば元(藥)
 い元(癒)
 あま元(甘)
 おび元(脅)
 おほ元(覺)
 き元(消)
 きこ元(聞)
 こ元(越)
 こ元(肥)
 こ元(凍)
 さ元(冴)
 た元(絶)
 ひ元(冷)
 ふ元(殖)
 ほ元(吠・吼)
 も元(燃)
 もだ元(悶)

を・お・ほ・ふ
 語の上ではを・おが互に紛れ、語の下中ではほ・まが用ひられる。おは語の中下に用ひることはない。左の語の外は語の上ではお、中と下とはほと書く。

を(男・雄・夫・牝)
 をつと(夫)
 をとこ(男)
 めをと(夫婦)
 たけを(猛夫)
 ますらを(丈夫)
 をひ(甥・姪)
 ををし(雄雄)
 を(小)
 をとめ(少女)
 をち(伯父・叔父)
 をば(伯母・叔母)
 を(女)
 をみなへし(女郎花)

を(尾)
 をばな(尾花)
 を(緒)
 はなを(鼻緒)
 を(麻・苧)
 をけ(桶)
 をさ(箆)
 をか(岡・丘・陸)
 をかぼ(陸稻)
 をがむ(拜)
 をかし(可笑)
 をかす(犯)
 をぎ(荻)
 をこ(痴・愚)
 をこがまし(痴)
 をさ(長)
 をさなし(幼)
 をさむ(治修・收藏納)
 をさな(大抵)
 をしどり(鶯鶯)
 をしふ(教)
 をしむ(惜)

をす(食・治)
 をち(遠)
 をちこち(遠近)
 をととひ(一昨日)
 をととし(一昨年)
 をとり(囚・媒鳥)
 をどる(踊・跳・躍)
 をの(斧)
 をのく(慄)
 をはる(終・卒・了)
 をり(檻)
 をり(節)
 をり(居)
 をる(折)
 をしき(折敷)
 しをる(萎)
 しをり(葉)
 つづらをり(九十九折)
 ぞろち(大蛇)
 あを(青)
 あそがひ(蝶・銅・青貝)
 あをし・あをむ(青)

いさを・いさをし(功績)
 うを(魚)
 かつを(鱈)
 ひを(氷魚)
 しらうを(白魚)
 かをる(香薰)
 さを(竿・棹)
 しをん(紫菀)
 しをらし(可憐)
 しをる(萎)
 たをやか(嬋妍)
 たをやめ(手弱女)
 とを(十)
 ばせを(世蕪)
 まをす(申)
 みさを(操)
 みを(澤・水脈)
 みをつくし(澤標)
 やをら(徐)

あふひ(葵)
 あふぐ(仰)
 あふぐ(煽)
 あふぎ(扇)
 あふる(煽)
 あふみ(近江)
 とほたふみ(遠江)
 きふ(昨日)
 けふ(今日)
 さふらふ(候)
 たふる(仆・倒)
 たふとし(貴)
 はふる(投)
 ふくろふ(鼻)

じ・ち
 じ・ちは語の上・中・下とくにあつてもじに紛れる。左の語の外はじと書く。

ち(父)
 をち(伯父・叔父・小父)
 ちち(爺・祖父)

ち(路)

やまち(山路)

よみち(黄泉)

すぢ(筋)

うち(氏)

ひぢ(臂)

あぢ(味)

あぢはひ(味)

あぢ(鱗)

いちらし

かぢ(棍)

かぢ(銀冶)

ひぢ(泥)

ふぢ(藤)

ふぢばかま(藤袴)

こうぢ(麴)

くぢら(鯨)

よぢる(攀)

けぢめ(區別)

ことぢ(琴柱)

ねぢ(螺旋)

ねぢく(拗)

あぢさゐ(紫陽花)

ちぢむ(縮)

なんぢ(汝)

もみぢ(紅葉)

わらぢ(草鞋)

なめくぢ(蛞蝓)

みそぢ(三十)

よそぢ(四十)

いそぢ(五十)

むそぢ(六十)

ず・づ

ず・づは語の上・中・下どこにあつてもともに紛れる。左の語の外は、づと書く。

ずす(誦)

ずす・じゆず(數珠)

ずるし・ずるける(狡猾・怠慢)

あんず(杏子)

ゆず(柚子)

いしずゑ(礎)

こずゑ(梢・木末)

かぢ(數)

かならず(必)

きず(傷・疵・瑕)

くず(葛・國柘)

すぢ(鈴・錫)

すずき(鱸)

すずし・すずむ(涼)

すずしろ(蘿蔔)

すずな(菘)

すずめ(雀)

すずり(硯)

すずろ(漫)

たたずむ(忤)

なずらふ(準)

ねずみ(鼠)

はず(管・弭)

やはず(矢管)

ゆはず(弭)

はずみ(機)

ます(雜・交・混)

みみず(蚯蚓)

もず(百舌鳥・鴟)

さ行變格活用の濁れるもの。

禁ず信ず等

常用漢字

字

(大正十二年五月臨時國語調査會發表、昭和六年五月修正)(千八百五十八字)

【一】一丁七丈三上下不世丙並

【一】中

【一】丸主

【一】之久乏乘

【乙】乙九乞也乳亂

【丁】了事

【二】二五五井

【二】亡交亦京亭

【人】人仁仇今介仕他付

代令以仰仲件任伊伏伐

休伯伴伸伺似位低住佐

何余佳佛作使來例侍供

依侮侯侵便係促俊俗保

狹信修俱俳佞俸倉個倍

倒候借倫併假偉偏停健

側偶傍傑備催傳債傷傾
僅働像僚僞僧價儀億儉
償優

【九】元兄充兆兇先光克
免免兒

【入】入内全兩

【八】八公六共兵其具典
兼

【冊】冊再

【元】元

【シ】冬冷涼准凌凍

【凡】凡

【凶】凶出

【刀】刀刃分切刊刑列初
判別利到制刷券刺刻則
削前剛副剩割創劇劍劑

【力】力功加劣助努効勅
勇勉勳勸務勝勞募勢勸
勳勳勸

【包】包

【北】北北

【區】區

【十】十千升午半卓卒卓
協南博

【占】占

【印】印危却卵卷卽

【厄】厄厘厚原厥

【去】去參

【友】及友反叔取受

【口】口古句叫召可史右
司各合吉同名后吏吐向
君吟否含呈吸吹告咸周

味呼命和咽哀品員哲唐
唯唱商問啓善喚喜喪喪
單嗣嘉器噴嚴囑

【囚】囚四回因困固國圍
國圍圖圍

【土】土在地坂均坊坑坪
垂型埋城域執培基堀堂
堅堤堪報場塔塗塵境墓
塀增墨墮壁壇壓壤

【士】士壯壹壽

【夏】夏

【夕】夕外多夜夢

【大】大天太夫央失奇奉
奏契奔奢輿奪獎奮

【女】女奴好如妃妊妥妙
妨妹妻姉始姑姓委姦姪

【缶】缺	【舛】舞	【言】言訂計討訓託記詒	【車】車軌軍軒軟軸較載
【網】罪置署罰罵罷羅	【舟】舟航般舵舶船艦	訪設許訴診詐詔評詞詠	輕輦輪輯輸輿轉
【羊】羊美羣義	【良】良	試詩詰話詳誇誌認誓誕	【辛】辛辨辭辯
【羽】羽翁翌習翼	【色】色	誘語誠誤說課調談請論	【辰】辰農
【老】老考者	【艸】芝花芽芳苑苗若苦	諭諸諾謀調諮講謝諂謹	【是】込迎近返迫迭述迷
【而】耐	英茂茶草荒荷莊菊菌菓	謬證識譜警譚議護譽讀	追退送逃逆透逐途通速
【耒】耒耕	荼華萬落葉著葬蒙蒸蓄	變讓	造連週進逸逸遇遊運過
【耳】耳聖聞聯聲職聽	蔓薄藏藝藤藥		道達遠遙遞遠遣適遭暹
【聿】肅肇	【虺】虺虐處虛號		遷選遺避還邊邊
【肉】肉肖肝股肥肩育肺	【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲蠶	【豕】豚象豪豫	【邑】邦邪邸郊郎郡部郵
胃背胎胞胴胸能脅脈脊	【血】血衆	【貝】貝貞負財貧貨販買	都鄉
脚脫腐腕腦腰腸腹膚膜	【行】行術街衢衛	賁貯貳貴買貨費賀賀貨	【酉】酌配酒酢酬酷酸醉
膝臆臆膺臆	【衣】衣表衰袋袖被裁製	賄資賊資賜賞賢賣賤賦	醜醫
【臣】臣臥臨	裏裕補裝裸製複褒襲	質賴購贈贊	【采】釋
【自】自臭	【西】西要覆	【赤】赤	【里】里重野量
【至】至致臺	【見】見規視親覺覽觀	【走】走赴起超越趣	【金】金釜針鈞鈍鈴鉛鉢
【白】與興舉舊	【角】角解觸	【足】足距跡路踊躍	銀鉢銅銘銳鋒鋼錯錄錢
【舌】舌舍		【身】身	鍋鎖鎮鏡鑄鐘鐵鑑鑛

【長】長	【面】面	【馬】馬馳駁馱駐騎騰驪	【麥】麥
【門】門閉開閑問閑閑關	【革】革靴	驅驗駭驛	【麻】麻
【阜】防附降限陞院障除	【音】音響	【骨】骨髓髓	【黃】黃
陪陳陰陵陶陷陸陽隆隊	【頁】頁項順頤預頤頤頭	【高】高	【黑】黑默點黨
階隔隙際障隣隨險隴	頻頤額頤頤頤頤頤頤	【毛】髮	【鼓】鼓
【隹】隻雀雄雅集雁雌雙	【風】風	【門】闕	【鼻】鼻
雜離離	【飛】飛翻	【鬼】鬼魂鹿	【齋】齋
【雨】雨雪雲零雷電霏震	【食】食飢飲飯飾養餓餘	【魚】魚鮮鯉鯛	【齒】齒齡
霜霧露靈	餅館餐	【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄	【龍】龍
【青】青靜	【首】首	【齒】齒	【龜】龜
【非】非	【香】香	【鹿】鹿	

注意

- (一) 本表にない漢字は假名で書くこと
- (二) 固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、ただし外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること
- (三) 代名詞・副詞・接續詞・感動詞・助動詞および助詞はなるべく假名で書くこと
- (四) 外來語は假名で書くこと。

略字表

(臨時國語調査會發表)

左の字體を本位として用ひること。
(括弧内の小字は字典體)

勸(勸) 權(權) 灌(灌) 歡(歡) 觀(觀)
 沢(澤) 扒(擇) 訳(譯) 馱(驛) 积(釋)
 变(變) 恋(戀) 蛮(蠻) 湾(灣)
 莖(莖) 徑(徑) 經(經) 輕(輕)
 併(併) 塤(塤) 瓶(瓶) 餅(餅) 研(研)
 齊(齊) 齋(齋) 濟(濟) 劑(劑)
 残(殘) 淺(淺) 賤(賤) 錢(錢)
 勞(勞) 嘗(嘗) 榮(榮) 學(學) 覺(覺)

举(舉) 眷(眷) 断(斷) 繼(繼)
 齒(齒) 齡(齡) 湿(濕) 頭(顯)
 窓(窗) 綵(總) 属(屬) 囑(囑)
 為(爲) 偽(偽) 帶(帶) 滯(滯)
 參(參) 慘(慘) 兩(兩) 滿(滿)
 発(發) 癢(癢) 胤(胤) 獾(獾)
 乱(亂) 辞(辭) 潜(潛) 贊(贊)
 走(走) 伎(徒) 位(從) 縱(縱)
 惱(惱) 腦(腦) 処(處) 扱(據)
 担(擔) 胆(膽) 耒(來) 麥(麥)
 寿(壽) 鑄(鑄) 数(數) 樓(樓)

樂(樂) 菓(菓) 讀(讀) 統(續)
 竜(龍) 滝(瀧) 隨(隨) 髓(髓)
 廉(廉) 簾(簾) 聽(聽) 廳(廳)
 虚(虚) 戲(戲) 遲(遲) 解(解)
 独(獨) 触(觸) 疊(疊) 撰(攝)
 虫(蟲) 蚤(蚤) 仮(假) 兎(兎)
 励(勵) 嘗(嘗) 国(國) 困(困)
 円(圓) 図(圖) 尙(尙) 実(實)
 写(寫) 宝(寶) 扣(控) 叙(叙)
 条(條) 様(様) 帰(歸) 气(氣)
 炉(爐) 犧(犧) 猷(猷) 画(畫)

甬(甬) 尽(盡) 礼(禮) 称(稱)
 糸(絲) 欠(缺) 声(聲) 台(臺)
 旧(舊) 万(萬) 号(號) 証(證)
 豊(豊) 弁(辨) 遞(遞) 辺(邊)
 医(醫) 鉄(鐵) 関(關) 双(雙)
 靈(靈) 余(餘) 館(館) 体(體)
 塩(鹽) 点(點) 覚(覺)
 閑(閑) 刺(刺) 龟(龜)

第二學年

中組

11

沖永澄子

